

二五 ところで、このような気質のアントニウスにとってクレオパトラに対する恋は破滅的な禍いとなり、彼の中にまだ隠れ、静まっていた情熱の多くを呼び覚まし、駆り立て、いくらか実直で、救いとなる性質がなおそれに抵抗したとしても、それを消散させ、滅ぼしてしまつた。彼が俘虜となつたのは次のような有様であつた。彼がバルティアとの戦いにとりかかつたとき、クレオパトラにキリキアで会見して、彼女がカッシウスに多額の金を送つて戦争に協力したとの非難に対して返答をするよう申し送つた。使節として遣わされたデリウスは彼女の容姿を眺め、話しぶりの賢しさと抜目なさを認めて、アントニウスはこれほどの女には少しも危害を加えないであらうし、今にアントニウスのもとで最大の女になるであらうとただちに気づくと、機嫌をとることにして、このエジプトの女にホメロスの詩句(『イリアス』一四卷一六二)にあるように、「美しく身を装ってキリキアに行くように」勧め、アントニウスは將軍たちのうちで最も気持のよい、親切な人だから恐れなくてもよいと言つた。クレオパトラはデリウスの言葉に従い、また以前、彼女の(「前の」)カエサルおよびポンペイウスの子グナエウスとの美貌にもとづく交わりから判断して、アントニウスを一層容易に思ひのままにできるとの希望を抱いた。というのは、前のふたりを知つたのは、彼女がまだ娘で、物を事を心得ないときではあつたが、今度は女の美しさが最も輝かしく、頭の働きも冴えている盛りの年頃になつてアントニウスに会いに行こうとしてゐるからである。そこでクレオパトラは多くの贈物と金、それに高い地位と栄えた王国から受けるにふさわしい装身具を調べたが、自身自身と彼女の發散する魅力と手管に望みをかけて出立した。

二六 クレオパトラはアントニウス自身からとその友人たちからも多くの招待状を受けとつたので、彼女はこの男を軽蔑し、嘲笑してから、鱈を黄金で飾つた船に乗つてキエドノス川を遡り、緋色の帆を張り、漕手は銀の櫂を竿と琴を伴奏とする笛の音に合わせて漕いだ。クレオパトラ自身は黄金をちりばめた天蓋の下に絵画にあるアフロディテのように着飾つて腰をかけ、また絵画にあるエロスのようななりをした子供たちが

エチオピア人、トログロデタイ人、ヘブライ人、アラビア人、シリア人、メディア人、バルティア人のいづれにも自分で返答した。その他の多くの民族の言葉をも彼女は習得してと言われているが、彼女より前のエジプトの諸王はエジプト語さえ字ぼうと努めず、マケドニア語さえお手あげであつたものもあつた。

二八 こうしてクレオパトラがアントニウスを捕えたが、その間ローマでは妻のフルウィアがアントニウスの権益を護つてカエサルと戦い、またバルティア軍がメソポタミアのあたりに策動し、そこでは王の將軍たちがラビエヌスをバルティア軍の総司令官に任命してシリアに侵入しようとしてゐるのに、アントニウスはクレオパトラの言いなりになつてアレクサンドリアに行つてしまつた。そこで彼は閑若者のように競技や遊戯に耽つて、アンティフォンのいう「最も贅沢な浪費、すなわち時」(『ディールス断片』七七)を浪費した。すなわち、ふたりは「真似のできなない暮しをする人々」といつた会を作り、毎日互いに宴会を開き、信じられない程の過度な浪費を行なつた。とにかく、私の祖父がよく語つたところによると、アンフィッサの医師フィロタスはその頃、医術を學んでゐたが、王家の料理人のひとりと親しくなり、まだ若かつたので彼に勧められて、饗宴の豪華な用意を見に行つた。ところで司厨につれて行かれると、いろいろ他の食物も多量にあつたが、とりわけ猪が八頭も炙られてゐるのを見て、客人の數に驚いた。すると料理人は吹き出して、客人は多くはない、十二人くらいだと言つた。出される料理はそれぞれ、食べ頃でなければならず、少し間をおくと味が落ちるといふのである。しかもアントニウスは急に食事の注文をしたかと思つと、少し経つと………、酒を出せと言つたり、誰かと話しこんだりする。そこで料理も一回分だけでなく、何回も用意しなければならぬが、ちょうどよい頃合を当てることは難しいと料理人は言つてゐた。ところがさういふ話をよくしてゐたフィロタスは、時が経つにつれて、アントニウスがフルウィアによつてもうけた長男の侍医の中に入つたが、この息子は父と一緒に食事をしない時にはいつも仲間の他の者たちとともに彼のとき

両側に侍立して彼女を煽いでいた。それと同じくいちばん美しい侍女たちがネーレイデスやカリテスの装いをして、あるものは舵のところに、あるものは帆綱のところにいた。多くの薫香のかぐわしい香りが兩岸に發散された。川の近くの住民たちは兩岸からこれにつき随い、市の住民たちは見物に下りてきた。市場にいた群集も散つてしまひ、とうとう演壇にいたアントニウスが独り取り残された。アフロディテがアシアの幸福のために、ディオニソスのところにお祭騒ぎをしに來たという噂が四方にひろまつた。

そこでアントニウスはクレオパトラを食事に招く使ひをやつたが、彼女はそれよりも彼の方が自分の方に来てもらいたいと思つた。するとアントニウスはすぐさま、鄭重さと友好的態度を示そうと思ひ、承諾してやつてきた。言い尽し難い用意がなされてゐたが、とりわけ燈火の數の多いのに驚嘆した。というのは、そのような燈火が備えられて、一度にあらゆる方向から輝き、しかも互いの角度と位置から四角や円になるように配置されてゐたので、これに勝る美しい観物はほとんどないようであつた。

二七 次の日、アントニウスは返礼の宴を開き、華麗と優雅でクレオパトラを凌ぐと切望したが、その両方とも退け目に終つて、正にそれらの点で打ち負かされ、真先に自分の方のもてなしの貧弱さと趣味のなさを嘲ける始末となつた。クレオパトラはアントニウスの冗談から、この男がほとんど兵隊風で、下品だと見抜くと、もうこの男に容赦なく、あけすけにさういふ態度をとつた。それというのも、彼女の美もそれ自体では決して比類のないというものでなく、見る人々を深くとらえるというほどのものではなかつた。しかし彼女との交際は逃れようのない魅力があり、また彼女の容姿が会話の際の説得力と同時に同席の人々のまわりに向かふりかけられる性格とを伴つて、針のようなものをもちたらしめた彼女の声音にはまた甘美さが漂ひ、その舌は多くの紋のある楽器のようであつた。容易に彼女の語らうとする言語にきりかえることができ、非ギリシア人とも通訳を介して話をするとはきわめて稀で、大部分の民族には、

ろで食事をしていた。ところである時、ひとりの医者が傍若無人にふるまつて、食事仲間いろいろな不快な思ひをさせたのでフィロタスは次のような詭弁を吐いて、この男の口を塞がせた。「いく分でも熱の上つてゐる人には冷水を与えねばならない。しかし熱の上つてゐる人はすべていく分が發熱してゐる。しかも故に熱の上つてゐる人には熱すべ冷水を与えねばならない。」そこでその男はやつつけられて、黙つた。冷たさで、アントニウスの息子は嬉しがつて笑ひながら「フィロタス、これをすつかり君にあげよう」と言つて、大盃がたくさんおいてある食卓を指した。フィロタスはその厚意を受け容れたが、こんな年端も行かぬ少年にこれほどのものを授ける力があるとは全く思ひがけなかつたが、少しあとで奴隸のひとり、それらの盃を袋に入れてもつてきて、封印をしてくれと言つた。彼はしりごみして受け取るのを恐れてゐると、その男は「困つた方ですな、どうして遠慮なさるのです。下さつたのはアントニウスの御息で、このような黄金の器でも人に贈ることがおできになるのは御存じではありませんか。まあ私の言うことをきいて、それを全部金に換えて下さい。そのうちに父君が古い、細工を凝らした品がいくつも見当らなくなつたのに気づかれることでしょう」と言つた。

- (1) 原文では「イデーの山」。ヘラがギリシア軍を助けるためにゼウスを欺いて眠らせるくだりである。
- (2) 大ポンペイウスの長子、本伝一〇に記されたムンダの戦いでカエサルに敗れ、捕われて後殺された。クレオパトラとの情事はユリウス・カエサルより前、前四九年エジプトに赴いてゐた頃のことであらう。
- (3) キリキアの中心都市タルソスのほとりを流れてゐる川。
- (4) ネーレイデスは海神オケアノスの娘たち、カリテスは優美の三女神。
- (5) 「洞穴の住民」の意で、紅海西岸北部に住む民族。
- (6) 前五世紀のアテナイのソフィスト。
- (7) ステファノスによると少し欠文あり、欠文を認めぬ校訂本もある。
- (8) マルクス・アントニウス・アンテヌルルス、前三〇年アレクサンドリア陥落後オクタウィアヌスに殺された。本伝八七。

フィロタスはこの話を折あることにしたものだ。祖父は私に語っていた。
二九 クレオパトラは彼女の阿諛をプラトンの言うように(『ゴルギアス』四六四C)四通りでなく、いく通りにも使い分けて、アントニウスが真面目なときも、ふざけているときもいつも何か新しい快楽と魅力を加えて夜といわず昼といわず、アントニウスを独りしておかずに飼育していた。彼女は彼と一緒に勝負をし、酒を飲み、狩猟に行き、武器で訓練するのを眺め、また夜、アントニウスが庶民の家の戸口や窓口に佇んで中にいる人々をひやかすときにも、召使の着物を着て一緒に歩き廻った。アントニウスも同じような扮装をしてみていたからである。そこで彼はいつも罵られ、度々打たれては帰館したが、多くの人々はそれとなく感づいていた。しかしアレクサンドリアの市民たちは彼の悪ふざけを嬉しがり、うまく調子を合わせ、垢ぬけしたやり方で一緒に楽しみ、アントニウスに好意を示しながら、彼はローマ人に対しては悲劇の面を、自分たちには喜劇の面を使っていると言った。

ところでアントニウスが行なつた子供じみた戯れの数々を述べたてるのは全く無意味なことである。しかしある時、彼は釣をしたが、ついでいず、クレオパトラがその場にいたので困って、漁夫たちに命じて水中に潜らせ、私かに彼の釣針の前に捕えていた魚をつかせ、二、三度釣り上げてみるうちに、このエジプト女に見破られてしまった。しかし彼女は感服したように見せかけ、友人たちにも吹聴し、翌日それを見にくるよう招いた。そこで多くの者が釣舟に乗りこみ、アントニウスが釣糸を下すと、クレオパトラは自分の家来のひとりに命じ、先手をとって釣針のところに潜行し、黒海産の干魚をつかせた。アントニウスは魚がかかつたと思つて引き上げると、案の定大笑いになったが、クレオパトラは言った。「インペラトル、あなたの釣針は私の国のファロスやカノボスの王にお譲りなさい。あなたの釣の獲物は都市や王国や大陸なのですよ。」

三〇 こんな風に馬鹿げたことや、子供じみたことにアントニウスが耽つていたところに、不意に二つの報せが届いた。そのひとつはローマかつてエジプト女との恋愛と戦つていた。オクタウィアは非常な美貌に加えて品位と分別を兼ね備えていたので、アントニウスと結ばれて、これほどの女であるから当然愛されて、ふたりがすべての事柄の救いとも、堅めともなるであろうとすべての人々は希望して、この結婚を成立させようとなつた。さてふたりが承知したので、法律では夫が死んで十カ月経つまでは「寡婦は」結婚を許されなかつたが、元老院の議決によつてその制限期間が緩和されたので、ふたりはローマに上つて、オクタウィアとの結婚式をあげた。

三一 セクステイウス・ポンペイウスがシリリーを占拠して、海賊のメナスとメネクラテスの指揮する多数の海賊船でイタリアを劫掠し、そのあたりの海を航行できないようにしていたが、アントニウスに対しては好意を抱いているように思われ、その母がフルウィアとともに(「ローマから」)脱出したのを受け容れてくれたりしたので、この人とも妥協することにした。そこでアントニウス、カエサル、ポンペイウスの三人はミセスムの岬と防波堤で会合し、その付近にポンペイウスの艦隊は碇泊し、アントニウスとカエサルの陸軍部隊も陣營を張った。ポンペイウスはシリリーとサルディニアを領有して、海賊を海から掃蕩し、ローマに一定額の穀物を供給することに協定が成立したのち、彼らは互いに食事に招き合つた。籾をひくとポンペイウスがまずほかのふたりを饗応することになった。どこで食事をするのかとアントニウスが尋ねると「そこだ」とポンペイウスは六段階のある旗艦を指して「これがポンペイウスに遺されている父祖伝来の家なのだ」と言った。このことを彼は父ポンペイウスのものだった家を取得しているアントニウスに対して非難する意味で言った。その船を彼は錨でとめて、岸から橋のようなものを架け、快くふたりを迎えた。一同の話が弾み、クレオパトラとアントニウスに対するひやかして花が咲いていたとき、海賊のメナスがポンペイウスの傍に来て、ふたりには聞えないように「船の錨を切つて、あなたをシリリーとサルディニアだけでなく、ローマ帝国の支配者にしましょうか」と言った。ポンペイウスはこれを聞いて、しばらく考えこんだが、「メナ

ら来たもので、彼の兄弟のルキウスと妻のフルウィアは最初は互いに仲が悪かつたが、やがてカエサルと戦争をはじめ、形勢不利でイタリアから逃走したというのであり、いまひとつはこれに劣らず香ばしくないもので、ラビエヌスがバルティア軍をひきいて、エウフラテスとシリヤからリディアとイオニアに至るアジアを従えようとしつつあるというのであつた。そこでやつと眠りから覚め、深酒から抜け出した人のように、バルティア軍に対抗するために出発し、フェニキアまで進軍したが、フルウィアが悲しみに充ちた手紙を送つてきたので、二百艘の船をひきいてイタリアへと方向を変えた。航海中に(「イタリアから」)逃走してきた友人たちを迎え入れると、戦いの原因はフルウィアであつて、天性事を好み、気の強い女で、イタリアで紛争が起ればアントニウスをクレオパトラから引き離そうと望んでいると知らされた。ところが思いがけなく、アントニウスのもとに航行しようとしていたフルウィアがシキエオンで病死したので、カエサルとの和解の好機がきた。実際、アントニウスがイタリアに到着しても、カエサルはアントニウスを公然と非難せず、アントニウス自身も自分がうけていた非難をフルウィアになすりつけたので、友人たちはその口実を吟味させないで、ふたつを和解させ、支配地域を分割し、イオニア海を境界とし、東方をアントニウスに、西方をカエサルに割り当て、レビドゥスにアフリカをもたせ、アントニウスとカエサルのふたりでコンサルになる気がないときには、各自の友人が順番でなるようにとり定めた。

三一 この協定は適当なことと思われたが、より強力な保障を必要としたのに、幸運がそれをもたらした。オクタウィアは「カエサルの」姉であつたが、母を異にし、彼女の方はアンカリアから、カエサルは後にアティアから生まれた。しかしカエサルは女の驚異と言われたこの姉を非常に好きであつた。彼女の夫ガイウス・マルケルスは少し前に亡くなつて寡婦になつていた。アントニウスもフルウィアが死んだので男やもめになつたと思われ、クレオパトラと関係をもっていることは否定されなかつたが、それは正式な結婚とは認めない、この点ではなお理性をも

スよ、それをやるんだつたら、私に前もつて言わないでおくべきだつたね。今のところはこのままでいいことにしよう。誓いを破るのは私のやり方ではないのだから」と言った。そこでその次はふたりからお返しに饗応をうけて、シリリーに船出して帰つた。

三三 この協定の後、アントニウスはウェンティディウスをアジアに先發させてバルティア軍の進軍を阻止させる一方、自分はカエサルに好意を示すため、前のカエサルの神官に任命され、さらにその他の政治的な重要事項についても協力して友好的に処理した。しかし勝負事ではアントニウスはいつもカエサルに負けて、めいりこんでいた。そのとき、彼のもとに人の運勢を占うエジプトの予言者がいて、クレオパトラをひいさしてか、本当のことを言うつもりか、アントニウスに直言して、彼の運は輝かしく、偉大であるが、カエサルによつて曇らされると言つて、この青年(カエサル)から、できるだけ距離をおいておくように勧めた。「あなたの神霊は彼の神霊を恐れています。それが自分だけであるとき、は威勢がよく、堂々としています。彼が近づいてくると、しやがみこんで、卑屈になるのです」と言った。しかも情勢はエジプト人の証言のようになっていふと思われた。というのはたまたま戯れに籾をひ

- (1) アレクサンドリアからヘブタスタディオオンという突堤で結ばれた島。プラトレマイオス朝初期にその北東部に大燈台が建造され、世界七ふしぎの一つに数えられ、ファロスは後に「燈台」を意味する普通名詞となつた。
- (2) アレクサンドリアの東にある漁夫の町。
- (3) トイブナー版による。「漁夫」とする異説もある。
- (4) プルタルコスはアンカリアを母とする長女のオクタウィアとアティアを母とし、オクタウィアヌスと同腹の次女のオクタウィアを混同している。アントニウスと結婚するのは次女の方である。彼女の前夫がガイウス・マルケルスであつたのは正しい。
- (5) 大ポンペイウスの次子、父の死後アフリカに向い、ムンダの戦いの後、シリリーを基地として海軍によりイタリア海岸を劫掠していた。
- (6) 大神官(ポンティファクス・マキシムス)に任命された。

いたり、賽ころを投げたりするたびに、アントニウスはうち負かされた。彼らは度々、鬪鶏や鶉の勝負をさせたが、勝つのはいつもカエサルの方であった。

こんなことからアントニウスはさりげない風を装っていても、気を腐らせていた。アントニウスは一層、エジプト人に耳を傾け、カエサルに一家の事を託してイタリアを後にし、オクタウィアを伴ってギリシアまで出かけたが、ふたりの間には娘が生れていた。アテナイで越冬している間にウェンティディウスの最初の成功が報道され、戦鬪でバルティア軍を屈伏させ、ラビエヌスとオロデス王の最も有能な將軍ファルナパテスを殺したということであった。これを祝ってアントニウスはギリシアの人々を宴に招き、アテナイ人たちのギムナシアルコスとなり、支配者の標章を家に残し、体育官の杖を手にし、ギリシア風の上着と白靴で競技場に赴き、青年たちを引き分けさせるのに、その首根っこをとらえた。

三四 さて彼が戦争に出発しようとしたときに、神聖なオリヴの枝で作った冠を戴き、ある神託に従って、クレプスエドラの水を容器に充たして携行した。その間に王子のパコスがバルティア軍の大軍をひきいて再びシリアに進撃してきたが、ウェンティディウスはこれを迎え撃ってキユレスティケで潰走させ、非常に多数の者を殺したが、パルコスも真先に戦死した。この功業は最もほめ歌われ、ローマ人にはクラッススの非運に対する充分な報復を与え、相次ぐ三度の戦鬪に完敗したバルティア軍をメディアとメソポタミアの内側に封じこんだ。しかしウェンティディウスはアントニウスの嫉みを懸念して、バルティア軍をそれ以上追撃することを断念したが、離反していた諸民族を攻撃して服従させ、コンマゲネの王安ティオコスとサモサタ市に包囲した。アンティオコスは一千タラントンを支払い、アントニウスの命令に従うことを請うたので、ウェンティディウスは彼に既に近くに進軍してきているアントニウスのもとに使節を送るよう命じたが、アントニウスはウェンティディウスがアンティオコスと休戦するのを許さなかったのは、せめてこ

タレントウムに到着したので、その住民たちは最も立派な光景を眺め、陸では大軍が静止し、海岸に向って多くの艦船が静かに停泊し、ふたりもその友人たちも互いに会って親しく挨拶を交した。アントニウスがまず食事に招くと、カエサルは姉のためにこれに応じた。協定が成立してカエサルはバルティア戦争に赴くアントニウスに二軍団を与え、アントニウスに青銅の衝角のある艦船を百隻提供することになったが、オクタウィアはこれらの協定の他に弟のために夫から二十隻の軽い船、また夫のために弟から一千人の兵士を求めた。このようにふたりは互いに妥結し、ひとりまたはだちにポンペイウスとの戦いのためシリヤに向い、アントニウスはオクタウィアとその子供たち、それにフルウィアの子供たちをカエサルに託してアジアに渡った。

三六 しかし長い間眠っていた恐ろしい禍いであるクレオパトラに対する情愛はほとぼりがさめて、よりよい思慮にとらえられてしまったように思われたが、アントニウスがシリヤに近づいてくると再び勢いを増して燃え上った。そして遂にブラトンが言っているように「フアイドロス」(二五四A-D)、魂を曳く獸(馬)のうちで頑固な、統帥し難いものの方が、すべて立派な、危う気のないものを蹴飛ばして、フオンティウス・カピトを遣わして、クレオパトラをシリヤに連れて来させた。そしてクレオパトラが到着すると、彼は莫大な贈物をし、フェニキア、コイレ・シリア、キュプロス、キリキアの大部分をその領土に帰属させ、さらにユダヤで香料の産する地方とナバタイ人の住むアラビアの外海に向って傾斜している地域をも与えた。この贈物はとりわけローマ人を憤慨させた。しかもアントニウスはめぼしい民族の分封国や王国を多くの私人に贈り、他方多くの王の領土を奪った。例えばユダヤの王安ティゴノスを公衆の面前に引き出して斬首したのは、これまで他の王がうけたことのない処罰であった。しかしクレオパトラに与えた栄誉は人々を最も憤慨させた恥辱であった。しかも彼はクレオパトラによってもうけた双生児を認知して、男の子をアレクサンドロス、女の子をクレオパトラと命名し、さらに前者をヘリオス、後者をセレネと添え名した。しか

の一つだけは彼の勲功にして、全部がウェンティディウスの勲功にしたくなかったからであった。ところが包囲戦は長く続き休戦を断念した人は勇敢に防戦したので、アントニウスは何ひとつも成しとげず、恥辱と後悔に駆られて、三百タラントンの支払いに甘んじてアンティオコスと和睦を結んだ。それからシリヤで細かい事柄を処理して、アテナイに帰り、ウェンティディウスに相応しい栄誉を与えて、凱旋式のために「ローマへ」帰還させた。バルティア軍から凱旋式を獲ちとったのはこの時までにはこの人だけで、無名の家の生れながら、アントニウスの友誼を得て、偉業をたてるきっかけを掴み、それをうまく使ってアントニウスとカエサルについて言われること、すなわち自分自身よりも他人によって將軍としての成功を収めるという言葉を実証した。というのはアントニウスの將軍ソックスもシリヤで多くの手柄をたて、アントニウスがアルメニアに残したカニディウスも、その他の人々に加えてイベリア人、アルバニア人の諸王をうち負かしてカフカズまで進軍した。そのためアントニウスの勢力の名声はこれらの蛮族の間に増大した。

三五 しかしアントニウス自身はいくつかの中傷によって再びカエサルに対して憤り、三百隻の船をひきいてイタリアに航行したが、ブルンディシウムの人々が艦隊を迎え入れないので、沿岸を廻ってタレントウムに入港した。ここで彼はギリシアから航海をともにしていたオクタウィアをその願いによって弟のもとに遣ったが、彼女は既にアントニウスによってふたりの娘を生んだらえに、今も懐妊していた。オクタウィアは途中でカエサルに行き会い、カエサルの友人のアグリッパとマエケナスを味方にとりつけ、カエサルにいろいろと愁訴し、懇願して、自分を最も幸福な女から最も不幸な女になってしまふのを見過ぎにしないでくれと頼んだ。というのは今でこそふたりのインペラトルの妻であり、姉でもあるとして、すべての人々が自分を仰ぎ見ているが、「もし邪悪が支配して戦争になれば、あなたたちのどちらが征服し、どちらが征服されることになっても、いずれにせよ、私の身の上はみじめなものになってしまいます」と言った。カエサルはこの言葉に負けて、もの穏やかに

しアントニウスは恥ずべき行ないをよい体裁に見せかけることには心得ていたので、ローマ人の支配は取ることにしておいても、与えることによつて偉大さが明らかになり、多くの王を生んで後継者にすれば高貴な家柄が拡大されるとし、とにかくこのようにして彼自身の先祖を生んだヘラクレスは、ひとりの腹に後継ぎを作らず、懐妊を規制したソロン⁽¹⁾の法律のようなものを恐れず、自然に委せて多くの種族の始原を遣したと言った。

三七 さてフラアテスが父のヒュロデスを殺して王国を奪取すると、ほかのバルティア人も大勢逃げ出したが、とりわけモナイセスという名望と権力のある人物がアントニウスのもとに逃げて来たので、アントニウスはこの人の運命をテミストクレスのそれに、また自分の富と大度をベ

- (1) ヒュロデスとする異本もある。
 (2) シリア北西部から流出している泉。
 (3) シリア北東部の地方。前一六二年シリヤ王国から独立した。
 (4) イベリア人とアルバニア人はこの場合、カフカズ地方南部に住む民族。
 (5) 「シリヤの窪地」の意。本来フェニキア境のレバノン山脈とその東のアンティレバノン山脈との間の地域を指したが、広義にはシリヤ南東部からバステイナ北部一帯の呼称ともなった。
 (6) アラビア北辺、パルステイナ南東部に住む民族、岩山に位するペトラを首都として王国を建て、東西交易で繁栄した。
 (7) 本来「四分領」の意でテッサリアに始まり、ヘレニズム諸国におよんだが、この時代には四という数には関係なく、シリヤ、パルステイナ地方のローマ宗主権下の諸侯領の呼称となった。
 (8) 本伝三のユダヤ王アリスタブローロスの次子。バルティア人に推され王となり、アントニウスの支持するヘロデスと対立したが、前三七年エルサレム陥落後、処刑された。
 (9) 『ソロン伝』二三参照。
 (10) バルティア王フラアテス四世(在位前三八頃—二二)。異本にはフラオ

ルシア王のそれになぞらえ、この人にラリッサ、アレトウサおよび以前バンビュケと呼ばれたヒエラポリスの三つの都市を贈った。しかしバルティア王がモナイセスに鄭重な使節を遣ったとき、アントニウスは喜んでモナイセスを送り返し、講和の見込みでフラアテスを欺こうと決心し、クラッスのときに奪われた軍旗と未だ生き残っている兵士の返還を求めた。彼自身はクレオパトラをエジプトに送り届けたのち、アラビアとアルメニアを経由し、自分と同盟国の諸王の軍隊の集結地まで前進し、軍を闊兵した。諸王の数は多かったが、その中の最大のはアルメニア王アルタウアステスで、騎兵六千と歩兵七千を引き具していた。ローマ軍自体は歩兵六万とローマ軍に編入されたイベリア人とケルト人の騎兵一万、さらに他の諸民族の兵は騎兵と軽装兵を合わせて三万を数えた。

このような陣備えと軍勢はバクトリアの向うのインド人をも恐れさせ、全アジアを震駭させたが、クレオパトラのせいでアントニウスはクレオパトラと冬を一緒に過そうと急いだため、戦機が到る前に戦争を始め、万事に混乱を惹き起し、自分自身の判断というものはなく、あたかも何か魔法の力の下におかれていくかのようにならずに絶えずクレオパトラの方に目を配り、敵を征服することよりも、早く帰還することを考えていた。

三八 そこで彼はまず最初にアルメニアで越冬し、八千スタディオンの進軍で疲労した軍隊を休養させ、そして春の初めにバルティア軍が冬営地から出動する前にメディアを占領すべきであったのに、その期間を待ちきれず、ただちにアルメニアを左手に見て軍を進め、アトロパテネに侵入してその地域を劫掠した。次に攻囲戦に必要な機械は三百台の車で運ぶのであるが、その中には八十ブリスもある衝角があつて、もしそれが破損すると、輿地では長さや堅さが十分な木材を産出しないため、そのひとつでも修理することができないので、急いでいたアントニウスは急進を妨げるとして後に残し、車にはスタティアヌスのひきいる相当な数の守備隊をおき、自らはメディア王の子や妻たちがいる大きな都市フラアタを攻囲した。しかし必要に迫られて攻城機を残してきたことがど

れほど間違っていたかが明らかになったが、同一個所に前進し、その都市に対して手間暇をかけて土堤を築いた。しかしその間にフラアテスは大軍をひきいて攻め下り、攻城機を積載した車が後に残されているのを聞くと、それに向つて多数の騎兵を送つたので、包囲されてスタティアヌス自身は戦死し、彼とともに一万人の兵士が殺された。さらに蛮族軍は機械を擄獲して破壊した。彼らはまた多くの捕虜を獲得したが、その中には王のボレモンもいた。

タディオオン、騎兵はその三倍も進んだが、敵の戦死者と捕虜を数えたところ、僅かに捕虜三十と屍体八十しか見出ださなかつたので、勝つてもこれほど少数しか殺せず、敗れたときには車の傍で倒れたようなあれほど多くの者が失われるとは恐ろしいことだと考え、当惑と失望が全軍を襲つた。次の日ローマ軍は装備を整えて、フラアタとその陣営に通じる道を進んだ。ところが途中で最初に敵軍の少数に、次に多数に、そして最後に全部に遭遇し、その敵軍はまだ負けたことのない新手のように四方八方から挑戦し、攻撃してきたので、ローマ軍が悪戦苦闘してどうやら安全に陣営に着いた。しかしメディア軍が土堤に対して突撃を行なつて防禦に當つていた者を逃走させたので、アントニウスは怒つて、これらの卑怯者にいわゆる一割処刑を適用し、彼らの全体を十人ずつに分けて、各組から籤に當つたひとりを殺し、他の者には小麦の代りに大麦を配給するように命じた。

三九 このことは言うまでもなく、緒戦に敗れたアントニウスの部下を悲しませ、さらにアルメニア(王)のアルタウアステスは戦争の主な原因となつていたにもかかわらず、ローマ側に見切りをつけて、自分の軍隊を撤退した。バルティア軍が包囲軍の前に威風堂々と現われて、傲り高ぶつて威嚇したので、アントニウスは平静を保っている軍隊が士気沮喪と驚愕に陥り、ひどくなるのを欲しないで、十軍団と親衛重装兵の三部隊および騎兵全部をひきいて食糧の徴発に赴き、このようにして敵をうまく引きつけ、陣形の整つた戦いにもちこもうとした。一日行程を行軍したとき、バルティア軍が円陣をなしてとりまき、行軍中の彼を襲撃しようとしているのを見てとつたので、戦わないうで退去するかのようにならずにテントを撤去しつつ、陣営には戦闘の合図を示し、半月形になつていた蛮族の戦列の傍を通りながら、敵軍の第一列が重装兵の捕捉範囲になつたと思われたときに、騎兵がめがけて突入するよう命じておいた。戦列に就いてはバルティア軍にはローマ軍の軍規が予想以上に見えたので、ローマ軍が等距離を保つて混乱もなく、沈黙のまま投槍を振りながら進むのを見守つていた。しかし合図がなされると、「ローマ軍の」騎兵は馬首を転じ、喚声をあげて突撃してきたので、バルティア軍がたちまち射程内に入ってきたローマ軍を迎撃したが、「ローマ軍の」重装兵も叫び声をあげ、武器を鳴らして攻撃に加わつたため、バルティア軍の馬は恐れて陣列から離れ、バルティア軍自体も自兵戦に入る前に逃走した。

四〇 この戦いは両軍にとつて苦しいものであり、その将来が一層気遣われた。アントニウスは戦傷者や戦死者は多くなかつたが、もはや食糧を得る道がなくなつたので、饑饉を覚悟し、フラアテスの方ではバルティア軍が冬の間、露天でさらに辛酸を嘗めて露営するくらいなら、どんなことでもやりかねないことをよく知つていたので、ローマ軍がねばつて留まると、秋分の後にはやがて大気がきびしくなるので、兵士たちが自分を見棄ててはしまいかと危惧していた。そこでフラアテスは次のような策略を考え出した。バルティア兵の中でローマ兵といちばんよく知り合いになつていた者は、食糧の徴発やその他の出合いの場合に、ローマ兵に対する攻撃を前よりも手加減し、彼らがいくらかの物をとることを許容して、その勇気を賞讃し、君たちは最も勇敢な人々で、君たち

るが、この強敵から逃れることはバルティア軍に護衛してもらつても難事だからと言つた。そこで多くの者がこのことをアントニウスに伝えると、彼は希望で心が柔らぐだが、そのような厚意を示している蛮族に果してはバルティア王がそういう気になつていられるのかどうか問ひ質すまで、王の許に使節を送らうとしなかつた。するとバルティア兵はそのとおりに言ひ、恐れたり、疑つたりしないようにと勧めたので、アントニウスは数名の友人を遣わし、再度、軍旗と捕虜の返還を求め、生命拾ひして逃れることばかりを望んでいると思われぬようにした。しかしバルティア王はそのことは急がないようにと言ひ渡し、アントニウスが立ち去りさえすれば、すぐにも平和と安全と言つたので、アントニウスは数日後に始末をして陣営を撤退した。アントニウスは民衆に対して演説をしたり、雄弁によつて軍隊を指揮したりすることにかけては、その当時の誰よりも能力をもつていたが、自分自身が恥じて気落ちしては、大衆を元気づける自信もなく、ドミティウス・アノバルブスにそれを命じた。そこである人たちは軽蔑されたとして憤慨したが、大部分の者は弱気になり、理由を察した。そのために一層この將軍を尊敬して、彼に服従すべきだと思つた。

四一 アントニウスは彼の軍隊をひきいて、平地で樹木のない道をひき返そうとしていたときに、マルドイ族に属し、バルティア人の風習にも精通し、攻城機をめぐつての戦闘では、既にローマ軍に信義を示したひとりの男がアントニウスの許にやつて来て、山を右手にとつて逃げるように勧め、重装備の部隊が逃走に際して掩蔽物のない開けた道で、あれほど多くの騎兵や弓兵に捕捉されないようにと警告し、そのことを企んでフラアテスが友好的な協定によつて包囲を解いたのであり、彼自身は

が、この強敵から逃れることはバルティア軍に護衛してもらつても難事だからと言つた。そこで多くの者がこのことをアントニウスに伝えると、彼は希望で心が柔らぐだが、そのような厚意を示している蛮族に果してはバルティア王がそういう気になつていられるのかどうか問ひ質すまで、王の許に使節を送らうとしなかつた。するとバルティア兵はそのとおりに言ひ、恐れたり、疑つたりしないようにと勧めたので、アントニウスは数名の友人を遣わし、再度、軍旗と捕虜の返還を求め、生命拾ひして逃れることばかりを望んでいると思われぬようにした。しかしバルティア王はそのことは急がないようにと言ひ渡し、アントニウスが立ち去りさえすれば、すぐにも平和と安全と言つたので、アントニウスは数日後に始末をして陣営を撤退した。アントニウスは民衆に対して演説をしたり、雄弁によつて軍隊を指揮したりすることにかけては、その当時の誰よりも能力をもつていたが、自分自身が恥じて気落ちしては、大衆を元気づける自信もなく、ドミティウス・アノバルブスにそれを命じた。そこである人たちは軽蔑されたとして憤慨したが、大部分の者は弱気になり、理由を察した。そのために一層この將軍を尊敬して、彼に服従すべきだと思つた。

自身の王が感服しているのももつともなことだと言つた。このようなことの後、バルティア兵は一層馬で接近し、馬を平気で傍に置き、アントニウスを非難した。というのはフラアテスは和解を望んで、これほど多くの優れた兵士の生命を助けようと思つているのに、アントニウスはそ

のきつかけを与えずに、坐してきびしい大敵である飢えと冬を待つてい

(1) 一世、前五年頃即位、クラッスがバルティアと交戦した頃はローマと同盟していたが、のちバルティア側についた。

(2) カスピ海の南西方、メディアの北西部。

(3) 『クラッス伝』一〇。

もつと近い、食糧の補給のできる道を案内すると言った。

アントニウスはこのことを聞いて一考し、休戦のあとでバルティア人に對し不信の態度をとるように思われたくはなかつたが、近道で、人の住んでいる村を通るのは得策だとして、このマルドイ人に誓約を求めた。するとその男は軍隊をアルメニアに連れて行くまでは自分を縛っておいてよいと申し出て、二日間縛られたまま平静に道案内した。しかし三日目になるとアントニウスもバルティア軍のことは全く忘れて気を緩めて行進していると、そのマルドイ人は河の堤防が最近決潰し、河流が彼らがこれから通らねばならぬ道の方に大量に流れ出ているのを見てとり、このことはバルティア人の仕業で、河流を流しこんで彼らの行手を妨げて暇どらせようとしていることを感づき、敵軍が接近しているから気をつけて警戒するようにアントニウスに促した。そこでアントニウスは隊列を整え、それによって投槍兵や投石兵を敵に對する攻撃の配置を整えたところに、バルティア軍が現われ、旋廻行動を始め、ローマ軍を四方八方から包圍して混乱に陥れようとした。そこでローマの輕裝兵が彼らに對して出撃すると、バルティア軍は矢を放って多数を傷つけたが、それに劣らぬローマ軍の鉛丸と投槍の傷を受けて退却した。それからバルティア軍は再び攻めよせたが、ケルト人が馬を集めて、彼らを襲撃し、蹴散らしたので、その日はもはや姿を見せなかつた。

四二 それ以来アントニウスはなすべきことを学びとり、後衛だけでなく両側を多数の投槍兵や投石兵で護衛し、長方形の陣形で軍隊を進め、騎兵には敵を攻撃して潰走させても潰走した後は深追いをしないように命じた。その結果バルティア軍がそれから四日間はローマ軍に損害を与えるよりも多くの損害を蒙って志気を減退し、寒気を口実にして退却を考ふるようになった。

しかし五日目に隊長の職にあつた勇敢果敢な男のフラウイウス・ガルスがアントニウスの許にやつて来て、大成功を収める目算があると言つて、後衛からかなり多くの輕裝兵と前衛から若干の騎兵とを要求した。そこでアントニウスがそれを許すと、ガルスは敵の攻撃は撃退したが、

いこと、人に物をやるのが好きで、しかもたつぷりやること、娯楽や實際の垢抜けしていること、とくにこの時は苦難を嘗めている人々と労苦とともにし、必要とするものを分け与え、強壯な人々よりも一層病人や負傷者の世話をしたことなどである。

四四 しかも敵は既に戦いを続けることを断念し、疲れきつていたので、勝利を得て意気揚がり、ローマ人を輕蔑したので、夜もローマ軍の陣營の近くに仮泊し、ほどなく無人のテントと脱走兵の持物を掠奪しようとして構えていた。夜が明けるとすぐに一層多く集まり、さらにバルティア王が平素は身辺に配置している兵士たちをも安全で確実な成功を目当てとして繰り出したので、騎兵の数は四万以上に達したと言われる。ただし王自身は一度も戦鬪に臨まなかつた。アントニウスの方は兵士たちに熱弁を振おうと思つて、彼らの目に一層憫みの心を起させるために灰色の上衣を求めた。しかし友人たちが反對したので、赤い將軍服を着て現われ、熱弁を振つて勝利を得た兵士たちを賞讃し、敗走した兵士たちを叱責した。そこで勝利を得た兵士たちは元氣を出せと勵まし、敗走した兵士たちは彼ら自身の弁解をして、彼が望むままに一割処刑なり、他の方法での処罰なりを彼らに課してよいから、意氣銷沈して悲しんでいることだけは止めてくれと頼んだ。それを聞くとアントニウスは両手を神神の方にさし伸べて、もしも何らかの怒りが彼のこれまでの成功に對して下されたのであつたとすれば、それは彼の身にふりかかつて、彼以外の軍隊には安全と勝利を授け給へと祈つた。

四五 次の日にローマ軍は武裝を強化して出撃したので、攻めよせてきたバルティア軍には大きな誤算となつた。というのは彼らは戦鬪ではなく、掠奪と鹵獲をめあてに出かけたつもりが、やがて多くの矢と槍を浴びせられ、しかもローマ軍が元氣をとり戻して強力となり、戦意を燃やしているのを見て、再び意氣沮喪した。しかしローマ軍が急な坂を降りて来たとき、バルティア軍はこれを攻撃し、緩慢に前進してくるローマ軍を射撃すると、ローマ軍の盾持ちの兵は方向を変えて、彼らの武器の内側に輕裝兵を包みこみ、彼ら自身は膝をついて盾を前に構え、後列の

以前のようにならずに重裝兵のところに引き戻さず、一層大胆に抵抗して戦つた。後衛の諸隊長はガルスが本隊から離れているのを見て、伝令を出して呼び帰そうとしたが、ガルスは聴かなかつた。クアエストル(財務官)のティティウスは多くの勇敢な兵士を失うことになるぞとガルスに非難して、彼の軍旗を抑えて、引き戻そうと努めた。しかしガルスは非難をしつて返しにし、自分の部下に留まれと命じたので、ティティウスは引き下つた。ところがガルスは前面にいる敵を撃退しながら、多勢の敵が背後から包圍して来るのに気づかなかつた。四方八方から石や矢で攻められて、ガルスは伝令を出して救援を求めた。重裝兵を率いた隊長たち——その中にはアントニウスの下で最も勢力のあつたカニディウスもいたが——も少なからぬ失策を犯したように思われる。というのは彼らは密集部隊全部を敵にさし向けねばならぬのに、少しづつしか援兵を送らず、それが敗れると別の援兵を送るといふ始末で、いつの間にかも少しで全軍を敗北と潰走に叩きこみそうになつたが、やつとアントニウス自身が前衛からの重裝兵を率いて迅速に救援に到着し、第三軍団はすぐに逃走する味方を通りこして敵を押し返し、その追撃を喰ひ止めた。

四三 戦死者は三千を上まわり、五千を数える戦傷者はテントに収容されたが、ガルスもその中にいて、ともに四本の矢を受けていた。ガルスは結局傷が癒らず、アントニウスは他の負傷者を見舞ひ歩き、涙を流し、心を傷めながら、いたわり勵ました。そこで負傷者たちは喜色を現わして、アントニウスの右手を執り、出て行つて自身の手当をして、心配しないように勧め、彼をインペトルと呼んで、アントニウスが健在でさえあれば自分たちは助かると言つた。つまり見たところ、武勇、忍耐または活力においてその当時、軍隊を集めて、これほど精彩のあるインペトルは他にはなかつた。兵士たちが將軍として彼に向ける尊敬と従順と厚意、それに有名と無名、公人と私人とを問はず、すべての人が、身の助かることと安全よりはアントニウスから重んぜられ、目をかけられることを選びとつたのは、昔のローマ人にも遜色はなかつた。その理由は前にも述べたように多くある。生れのよき、雄弁、氣どらな

者は前列の者の上に盾をかざし、次の列の者も同様にした。その形は屋根に似て劇場の観覽席のような光景を示し、最も堅固な防備となり、矢はそこから滑り落ちてしまつた。しかもバルティア軍はローマの軍兵が膝をついているのを疲労困憊していると考え、弓を棄て、投槍を握つて接近してきた。するとローマ軍は突然ときの声をあげて跳び起き、手で投槍を放つて前列の敵を殺し、他のすべての者を潰走させた。こういうことが他の日々にも起つて、ローマ軍は少しずつ前進した。

それにまた穀物が乏しくなり、饑餓が軍隊を襲つたのは、戦鬪のためばかりでなく、穀物を挽く道具が足りなくなつたためである。道具が多く棄てられたのは、駄獸が死んだり、病人や負傷者を運搬したりしたからである。一アッティカ・コイニクスの小麦が五十ドラクマで売られ、大麦のパンは同じ目方の銀で売られたと言われる。そこで兵士たちは野草や木の根に手をつけたが、平常食へ慣れているものはほとんどなく、これまで口にしたことのないものまで食べてみる他はなく、中には氣が狂つて死ぬ草を食べた者もあつた。というのはそれを食べた者は他のことは何も思ひ起しせず、ものごとの見わけもつかなくなり、ただそこらじゅうの石を動かしたり、転がしたりして、それをさも何か重要なやりがいのあることをやりとげているかのようになつてしまつた。そこでその原は地面にうつむいて石を掘り起しては動かしている人で充たされたが、唯一の治療薬であるぶどう酒がなかつたので、終には胆汁を吐いて死んだ。このようにして多くの兵士は死ぬし、バルティア軍は後に退かなかつたので、アントニウスはたびたび「ああ一万人の兵士」と叫んだと伝えられているが、クセノフォンの兵士がバビロニアから「海へ」のもつと長い道を進み、度々敵と戦いながら無事に帰つたことを感嘆したのであつた(クセノフォン『アナバシス』)。

(1) 直訳「その日のしるしをもはや示さなかつた」の意識。

(2) 異本では「アントニウスを尊敬し、感謝する」の意にとれる。

(3) 本伝三九。

四六 さてバルティア軍はローマ軍を潰乱することもできず、既に度々敗れて退いたが、再び秣草や食糧を探しに出たローマ兵と友好的に接触し、弦を弛めた弓を示して、自分たちは反転して、これで防戦も終りにし、ただ少数のメディア兵はなお一日か二日行程ローマ軍をつけて行くが、少しも害を加えず、ただ道から遠くにある村々を守るだけだと言った。このような言葉に鄭重な挨拶と友好的態度を加えたので、ローマ兵は再び元気をとり戻し、アントニウスもそれを聞くと、山道は水がないと言われていたので平原を求めようになつた。しかし彼がそうしようとしているときに、敵からひとりの男がアントニウスの陣営にやつてきた。その名はミトリダテスで、アントニウスの部下で三つの都市を贈与として受けたモナイセスの従兄弟に當つていた。この男がアントニウスに、バルティア語かシリア語の解る人を自分の許によこしてくれと求めた。そこでアントニウスの親友であるアンテオキアの人アレクサンドロスがミトリダテスの許に行くと、ミトリダテスは自分の身分を説明したのち、今示そうとしている好意はモナイセスによるものだと言ひ、前方に連なっている高い丘が見えるかと尋ねた。アレクサンドロスが見えろと言ふと、ミトリダテスは「あの丘の下にバルティア人が全軍勢であなた方を待ち伏せている。というのは大平原があの丘に接しているが、バルティア軍はあなた方が欺かれてあそこに向ひ、山道を去ることと待ち設けている。確かに山道は水に乏しく苦労が多いが、あなた方はそれに慣れているのに、アントニウスが平原の道を進むと、クラッススの運命が彼を待っていることを知らせてあげなさい」と言つた。

四七 このように言つてこの男は立ち去つた。アントニウスはこれを聞くと、大いに心を悩まして友人たちと道案内のマルドイ族の男を呼び集めたが、マルドイ族の男もミトリダテスと同じ考えであつた。というのは彼も平原を通る道は敵がいなくても、道がないも同然で、困難で見当もつかない迷路であることを知つており、山道の方は一日だけ水がないことその他は何も困難はないと言つたのである。そこでアントニウスはこ奪し、あげくの果はアントニウスの携帯品にまで手をつけ、高価な酒器や食卓をも破壊し分配した。

さて混乱が大きくなり全軍に拡がつたので「兵士たちは敵の襲撃によつて破壊と潰走が生じたと考えたから」アントニウスは自分の護衛兵で解放奴隷のひとり、ラムノスという男を呼んで誓いを立てさせ、自分が生きたまま敵に捕えられたり、敵に覺られないやうに、自分が命令したら首を斬り落せと言つた。アントニウスの友人たちが涙を流すと、マルドイ族の男は河が近いと彼を励ました。そちらの方から吹いて来る風も湿気があり、顔に当る冷気が呼吸を楽にし、行軍の時間も距離と一致すると言つた。残つている夜の時間はもう長くはなかつたからである。そこに同時に他の者たちが混乱は兵士たち相互の不正と貪欲から起つたのだと報告した。そこでアントニウスはちりぢりばらばらになつた集団の秩序を回復するために宿営の合図を指令した。

四九 既に曉の光がさし初めて軍隊はいく分か秩序と平静をとり戻しかけたとき、バルティア軍の矢がローマ軍の後衛に降り注がれたので、軽装兵に応戦の合図が出された。重装兵の方は再び前のように盾でお互いの身体を擁護してもち耐え、矢を射る敵兵も敢えて近くまでは攻め寄せて来なかつた。こうして先頭の部隊が少しずつ前進するうちに河が見えてきた。そこでアントニウスは河岸に騎兵を配列して敵に抵抗させ、まず弱っている兵士たちに河を渡らせた。戦っている兵士たちも安心して楽に水を飲むことができた。バルティア軍は河を見ても弓の弦を弛めてローマ兵を励まして河を渡れと勧めたうへ、大いに彼らの勇気を賞揚した。そこでローマ軍は平静に渡河し、隊伍を整えて行進を続けたが、少しもバルティア軍には気を許さないでいた。そして最後の戦闘から六日後にメディアとアルメニアの境にあるアラクセス河に着いた。その深さも速さも渡るのに危険に見え、またそこに敵が待ち伏せて渡河するときに襲いかかるという噂もあつた。しかし無事に渡つてアルメニアに一步をつけると、あたかもやつと海から陸地を見たかのように、ひれ伏して涙を流し、嬉しさの余り互いに抱き合つた。しかしローマ軍は豊かな

の道をとつて夜、軍隊をひきいることにし、水を携行するように命じた。しかし多くの兵士には容器がなかつたので、ある者は兜に水を充たして持ち運び、また他の者は革袋に入れて行つた。

しかしローマ軍が行進していることはすぐにバルティア軍に知られたので、まだ夜なのに彼らの習慣に反して追撃して来た。ちょうど日が昇る頃睡眠不足と労苦のために消耗していたローマ軍の後衛に追いついた。というのは後衛の兵士たちは夜の間に二百四十スタディオンも歩き通したからである。しかも敵がこんなに早くやつて来ようとは予期していなかつたので士気を沮喪した。その上、防戦しながら前進するので、この戦いは渴きをなはだしくした。先頭に進んだ兵士たちは河に到達したが、その河の水は澄んで冷たくはあつたが、塩気と毒素があり、それを飲んだ者にはすぐ腹の痙攣と焼けつくような渴きを伴つて苦痛を起させた。このこともマルドイ族の男が予め警告していたのに、兵士たちは止める人々を押し退けて飲んだのであつた。そこでアントニウスは巡回して兵士たちにも少し辛抱するようにと訴えた。それはそう遠くない処に水の飲める他の河があり、それから先は馬の通れない急な道になつているから、敵はきつと退却するに違ひないと言つた。それと同時にアントニウスは戦つている人々を呼び戻してテントを張るよう命令し、兵士たちが蔭で休めるようにした。

四八 そこでローマ軍はテントを張り、バルティア軍もやがて彼らの慣習のように退却しているところに、再びミトリダテスが到着し、アレクサンドロスは彼に合流するところ、再びミトリダテスは軍隊を少し休養させてから出発し、その河に急行すれば、バルティア軍は河までは追撃するが、渡河はしないと進言した。このことをアレクサンドロスはアントニウスに伝え、アントニウスの許から黄金の壺と壺を持ち出したが、それをミトリダテスは着物の下に隠せるだけ取つて立ち去つた。それからまだ明るい中にテントを畳んで出発すると、敵には悩まされなかつたが、お互いどうしでその晩をこれまでになく厭な恐ろしいものにした。というのは金や銀を持っている兵士を殺してそれを奪ひ、駄獣に付けた品目まで掠

地方を行進しながら、大きな欠乏の後ですべての食物を腹いっぱい味わつたので、水腫と下痢の病に罹つた。

五〇 ここでアントニウスは聞兵を行ない、歩兵二万人と騎兵四千人を失つたことに気づいたが、それはすべてが敵によつてでなく、半数以上は病氣によつてであつた。なるほどローマ軍はフラタから二十七日間行軍し、十八回の戦闘でバルティア軍を破つたが、追撃が短く、不徹底だつたので、その勝利には力も確実さもなかつた。その点については何はさておき、アントニウスはこの戦争の完遂を妨げたのはアルメニアのアルタウアデスであることは明瞭であつた。もしもアルタウアデスがメディアから連れ戻した一万六千の騎兵が居合せたならば、アルメニア軍はバルティア軍とほとんど同じ装備になり、これと戦うことには慣れていたから、ローマ軍は逃げる敵を潰走させる一方、アルメニア軍は逃げる敵を殺すこととなり、敵が敗北から立ち直つて、あのように度々士気を回復するようなことにはならなかつたであらう。そこで全軍は憤激してアルメニア王に思い知らせるようアントニウスに促した。しかしアントニウスは軍隊が弱体化し、補給をも欠いているので、熟慮してアルメニア王の裏切りを責めず、彼に対するこれまでの友好と敬意をも棄てないことにした。しかし後にアントニウスは再びアルメニアに侵入し、多くの約束や招待によつてアルタウアデスを手の中におびきよせて捕え、鎖をつけたままアレクサンドリアに連行して凱旋式を挙げた。そのためアントニウスは祖国の名譽ある莊嚴な儀式をクレオパトラのためにエジプト人に振舞つたとして、ローマ人を大いに怒らせた。もつともこれは後日の出来事である。

五一 さてこの時は既にやつてきた敵しい冬と降り止まない雪を衝いて進んだので、途中で八千人を失つた。アントニウス自身は少数の者ととも海辺に下つてベリネトスとシドンとの間にある地点、レウケーという村でクレオパトラが来るのを待った。しかし彼女が来るのが遅れたので不安になり、たちまち飲酒酩酊に身を委ね、じつと我慢して坐つていることができず、皆で飲んでる間にも度々立ち上り、外に飛び出して

見廻していたが、ようやくクレオパトラは兵士たちのために衣服と金を多く積んで入港した。ただしある人々の言うところではクレオパトラからは衣服だけ貰って、金は自分の持金から出し、クレオパトラの贈与金と言って分配したそうである。

五二 さて今やメディアア王はバルティア王フアラテスと不仲になったが、それはローマ軍の戦利品のことかきつかけとなり、さらにメディアア王は自分の支配権が奪われはしないかとの疑念と恐怖を抱いたからだと言われる。そこでメディアア王は使いを送り、自分の軍隊をもつて一緒に戦うからと約束してアントニウスを招いた。そこでアントニウスは大きな希望をもった。というのは一つのこと、すなわち多くの騎兵と弓兵が欠けていることのために、遠征してもバルティア軍を征服するのを妨げられていると思っていたのに、今度は自分が頼んだというより、頼みを許しているだけの軍隊が彼に加えられるのを見たので、再びアルメニアを通過して攻め上り、アラクセス河でメディアア王と合流して戦端を開く準備をした。

五三 ところでローマではオクタウィアがアントニウスの許に渡航するのを望んだのをカエサルが許したのは、多数の人が言うように、オクタウィアに好意を示したからではなく、彼女が冷淡に扱われ、侮辱された場合には、戦争のためのもつともらしい理由が生ずるかも知れないからであった。オクタウィアはアテナイに着くと、アントニウスからの手紙を受け取ったが、それにはそこに留まるように命じ、また内陸への遠征のことを打ち明けてあった。オクタウィアは心を傷め、口実だと見抜いたが、それでもアントニウスに便りを認め、彼女がアントニウスのために運んできたものをどこに送らせるよう指図するかと尋ねた。それというのもオクタウィアは多数の軍服と駄馬、アントニウスに従う隊長や友人のための金や贈物を運んできており、この他に優秀な武具を着けて親衛隊として装備された精兵二千をもひき連れていた。これらのことを報せたのはアントニウスの友人ニゲルという人物であり、彼はなお「オクタウィアに」ふさわしく適当な讃詞をも付け加えていた。

由から彼がアントニウスと戦う決心をするのでなければ、彼女自身の関する事柄はそつとして置いて貰いたいと思願した。最大の権力をもつインペラトルのうち、ひとりには女に対する情愛から、いまひとりには女に対する怒りからローマ人を内乱にひきこむのは聞えがよいからであった。このようなことを彼女は言っただけでなく、行動によって確証したというのはオクタウィアはあたかも夫が在宅しているかのようにその家に住み、自分の腹を痛めた子たちばかりでなく、フルウィアから生まれた子たちをも快く立派に世話をし、さらにアントニウスの友人たちで官職に就くためや用件のために、「ローマに」遣わされた人々を歓迎し、彼らがカエサルに請願する際に口添えをしてやった。しかしこのような行為でオクタウィアは心ならずもアントニウスを不利な状況に追いこむことになった。そのように立派な妻につれなくして見るとして憎まれたからである。それに加えてアレクサンドリアにいた自分の子供たちに対する取り扱いが芝居じみて、大げさで、ローマに敵意を示すように見えたために憎まれた。一例をあげると体育場を民衆で満員にし、銀の台座の上に金の椅子を二つ、一つは自分のに、も一つはクレオパトラのために設け、子供たちのために低い椅子を置き、まずクレオパトラをエジプト、キヌプロス、リビアおよびコイレ・シリアの女王とし、カエサルを彼女と共同統治の王と宣言した。カエサルは前のカエサルがクレオパトラを後に残したとき懐妊中であつたと思われていた。次にアントニウスは自分とクレオパトラとの間に生まれた息子たちに「王の王」という称号を与え、そのひとりのアレクサンドロスにはアルメニアとメディアアに、さらに征服できた場合にはバルティア人の地をも、またプトレマイオスにはフェニキア、シリア、キリキアを与えた。それと同時に息子の中でアレクサンドロスにはメディアア風の衣服を着せ、ティアラ⁽¹⁾と真直なキタリス⁽²⁾を被せ、プトレマイオスにはクレビス⁽³⁾とタラムス⁽⁴⁾と冠の形をしたカウシア⁽⁵⁾とをつけさせてつれ出した。後者の方はアレクサンドロス「大王」以来の玉衣であり、前者の方はメディアア人やアルメニア人の衣服であつた。その子供たちが両親に挨拶すると、ひと

クレオパトラはオクタウィアが自分の身近に来ると聞くと、オクタウィアの人柄に品位が具わり、カエサルの威勢を身につけている他に、人づき合いもよく、アントニウスにかしづくこととなる、無敵で、夫のアントニウスを完全に操縦するようになると恐れて、彼女自身アントニウスを恋い焦がれているふりをして、軽い食事をして身体を痩せさせ、アントニウスが近づくと、うつとりとした目つきを、立ち去ろうとする、力の抜けた憂いの目つきをした。それから度々泣いているところを見られるようにしながら、しかもそれをアントニウスに知られまいとするかのように急に涙を拭って隠すというような工夫をした。アントニウスがシリアから内陸に入り、メディアア王のところに向おうとしたときにこのような手管を使ったのであつた。彼女のとりまき連中もクレオパトラのために大いに努めてアントニウスを非難して彼を冷淡無情で、アントニウスに、いやアントニウスだけに献身している女を破滅させてしまふ人だと言うのを常とした。実際、オクタウィアの方は弟のための政略による結婚をして正妻という名を享受しているのに、クレオパトラの方はこれほど多くの人民の女王でありながらアントニウスの愛人とよばれ、しかも彼の顔を見て一緒に過すことができる限りは、そのような名を避けもせず、さげすんでもいないが、彼から袖にされたら生き延びてゆく気にはなるまいとその連中は言った。そこでついにアントニウスは彼らにまるめこまれ、弱気にされて、クレオパトラが命を絶つことを恐れてアレクサンドリアに戻り、バルティア人が内乱状態にあるとの報告があつたのに、メディアア王のことは夏まで延期することにした。それでもアントニウスは内陸に赴いて、メディアア王と再び交友関係を結び、クレオパトラによつてもうけた息子のひとりに王の娘のまだ若いひとりを妻として迎えて帰ると、すでに「カエサルに対する」内乱に立ち向う決意をしていた。

五四 他方カエサルにはオクタウィアが侮辱を受けたと思われたので、彼女がアテナイから帰ると、彼女自身の家に住むように言いつけた。しかしオクタウィアは夫の家から去ることを拒んだばかりでなく、他の理

りにはアルメニア人の、もうひとりにはマケドニア人の護衛兵をつけた。クレオパトラはこの時もその他の時も、公衆の前に姿を現わすときには、インシスの神聖な衣をまとい、新しいインシスと称えられた。

五五 カエサルはこれらのことを元老院にもち出し、また民会でも度々弾劾して、民衆をアントニウスに対して突きつけた。アントニウスの方も反撃してカエサルを非難する使いを送った。その主な非難は第一に、カエサルがポンペイウスからシシリーを奪取したとき、アントニウスにその島の一部を与えなかつたこと、第二にアントニウスから戦争のために軍艦を借りたまま返さないでいること、第三に同僚のレビドゥスをその官職から追放して、彼の名誉を傷つけ、レビドゥスに割り当てられていた軍隊も領土も収入も自分のものとしたこと、最後に彼自身の兵士にイタリアのほとんどすべてを分配して、アントニウスの兵士には寸土をも残さなかつたことであつた。これらの非難に対してカエサルは弁明し、彼がレビドゥスを解任したのは、彼が職権を悪用したからであり、彼が戦争によつて獲得したものは、アントニウスがアルメニアを彼と分割しさえすればアントニウスに分け与えるつもりであり、アントニウスの兵士にイタリアを分配しなかつたのは、彼らが彼らのインペラトルの下で善戦してローマ領に加えてメディアアとバルティアを保有しているからだと答えた。

五六 このことをアルメニアに滞在していたアントニウスは聞くと、すぐにカニディウスに十六軍団をひきいて海にまで下るように命じた。しかし彼自身はクレオパトラを伴つてエペソスに來た。ここには海軍があらゆる方面から集結して輸送船をも加えると八百隻に達したが、そのう

(1) 円錐形の帽子。

(2) ターバンのような冠。

(3) サンダルのような靴。

(4) 袖のないマント。

(5) マケドニア風のつば広の帽子。

ちクレオパトラは二百隻と他に三万タラントと戦争の期間中全軍に對する糧食を供出した。しかしアントニウスはドミティウスやその他の人に説得されて、クレオパトラにエジプトに航行し、そこで戦いの結果を待つように命じた。しかしクレオパトラはオクタウィアの働きかけでアントニウスに彼女のことを恐れ、カニディウスを多額の金で買収し、争から追ひ払うのは正しいことではないし、海軍の大部分を構成しているエジプト人の士気を沮喪させることは有利でもないし、その上クレオパトラは長い間、これほどの王国を独力で統治し、アントニウスと長い間一緒にいて、大事を処理することを学んだクレオパトラが思慮の点で從軍する諸王の誰に思慮の点で劣っているかを見わけられないと言った。すべての情勢がカエサルに掌中に帰する定めであったのか、この見解が勝ちを占め、全軍が集結する間に二人はサモスに航行し、快楽に耽った。アとイリリウムとの間にあるすべての民族と都市に戦争のための兵員物資を送り届けるように申し入れていたようにディオニソスの神に仕えるのほとんどすべての世界がうめきと悲しみに充たされていた。そこで周囲ひとつの島だけは連日、笛と弦楽器の音が絶えず、劇場は満員でコーラ諸王は互いに接待と贈物を競っていた。そこで戦争の準備だけでこのような大きなお祭騒ぎがされるのだった。そこで敵を征服しての勝宴では一体どんなことになるだろうと取り沙汰された。

五七 この祭りが終ると、アントニウスは芸能人たちに居住地としてブリエネを与え、彼自身はアテナイに航行して、また競技や演劇を催した。クレオパトラはオクタウィアがこの都市で受けた名譽を羨み——というのはオクタウィアはアテナイの人々から非常に敬愛されていたので——豪華な贈物によって民心を得ようとした。そこで民衆は彼女に敬意を表することを決議し、その家に使節を送って決議文を届けたが、その使節

のひとりには既にアテナイ市民になっていたアントニウスで、彼女の面前に立ってアテナイ市を代表して演説を行なった。他方ローマには使節を送って、オクタウィアを自分の家から追出すことにした。オクタウィアは、フルウィアの生んだ長子だけは「父のもとにいたから」別として、手もとにいたアントニウスの子供を皆つれて家を去ったが、彼女自身もまた戦争の原因のひとつになったと見られるのを歎き悲しんでいたといわれる。しかしローマ人は、とりわけクレオパトラを見て、美しさも若さもオクタウィアに優る女ではないと知っていた人々は、オクタウィアではなくて、アントニウスを気の毒に思った。

五八 カエサルはアントニウスの戦備の速さと大きさを聞くと、その夏、戦端を開くことをよぎなくされはしなかと困惑した。というのは多くの物資が不足していたし、租税の徴収が人々の心を痛めつけていたからである。実際、市民は収入の四分の一を、また解放奴隷は所有物の八分の一を納めねばならなかった。カエサルに対して非難の声を放ち、争を遅らせたことがアントニウス全体におよんだ。そのことから推して、戦のことがカエサルに準備の期間を与え、民衆の騒乱を終らせたからである。民衆は税金がとり立てられている間は憤慨していたが、とり立てられて納めてしまおうと平静になった。さらにアントニウスのコンスル級の友人であるティテイウスとブランクスはクレオパトラの從軍に最も強く反対したために、クレオパトラから侮辱を受けたことがあって、脱走してカエサルのもとに来て、アントニウスの遺言について、その書類の内容を知っていたので密告した。その遺言書はウニスタの処女たちのもとに寄託してあったのをカエサルは要求したが、処女たちは渡さず、それは出かけてそれを受けとり、彼自身とりに来るように命じた。そこでカエサル非難できる個所にするしをつけておいて、そのあとで元老院を召集して、それを読み上げると大部分の議員は不満の意を表した。というのは死後に実行されることが望まれている事柄について存命している人の責任を

問うのは、並外れた、不穏当なことだと思われたからである。それにもかかわらずカエサルはその遺言書の、とくに埋葬に関する件について強調した。それはアントニウスがローマで死んだとしても、彼の遺骸はフォルムを葬列で通ってアレクサンドリアのクレオパトラのもとに送るよう指図していた。カエサルの仲間のカルウイシウスはさらにアントニウスに対してクレオパトラに関すること、次のような非難を提起した。アントニウスが個別の書籍二十万巻を蔵した図書館をベルガモンから移して彼女に与えたこと、それから客の大勢いた宴会で、何かの約束と取りきめができたので、アントニウスが立ち上って、彼女の足をさすったこと、さらに彼の面前でエペソスの人々にクレオパトラを主人として挨拶することを許したこと、しばしばアントニウスが演壇の上に座して四分封主や王に対して裁判を行なっているときに、瑪瑙や水晶の書きもの板に記されたクレオパトラの恋文を受けとって読んだことがあること、ローマ人の中で最も優れて雄弁なフルニウスが演説していたときに、クレオパトラが駕籠に乗ってフォルムを通ると、それを見たアントニウスは演壇から跳び下りて裁判をほったらかして、駕籠の脇にくっついて彼女を送って行ったことなどである。

五九 もっともこれらの非難の大部分はカルウイシウスが嘘言をついたのだと思われた。しかしアントニウスの友人たちはローマの中を歩き廻って民衆に懇願する一方、仲間のひとりゲミニウスを送ってアントニウスに、彼自身も免官の決議をされたり、ローマ人の敵と宣言されることのないようにしてくれと頼んだ。ところがゲミニウスはギリシアに航行すると、クレオパトラからオクタウィアのために工作するのだとの疑いをかけられ、食事の際にも絶えず嘲弄され、ひどい座席をあてがわれて侮辱されていたが、隠忍してアントニウスと会談する機会を待った。そうするうちに食事の際には何の目的で来たのか言えと命ぜられて、ゲミニウスは他のことを報告するのは酔いをさましてでないと云えないが、さめていても酔っていても一つのことだけは解る、つまりクレオパトラをエジプトに送り帰せば万事うまく行くことだと言った。これに對

してアントニウスが立腹すると、クレオパトラは「ゲミニウスよ、あなたは拷問にかけられずに本音を吐いたとはお見事だ」と言った。そこでゲミニウスは数日後ローマに逃げ帰った。クレオパトラの提燈持ちたちはその他にもアントニウスの友人で、酔余の狼藉や安っぽいへつらいに我慢のできない多くの人々を追ひ払った。その中にはマルクス・シラヌスと歴史家のデリウスもいた。デリウスは医者でグラウクスが語ったことで、クレオパトラの彼に對するたくらみを恐れていたと言っている。彼は食事の際に自分たちは酸っぱい葡萄酒をふるまわれているが、サルメントゥスはローマでファレルヌス酒を飲んでいと話したのでクレオパトラの機嫌を損ねた。そのサルメントゥスというのは、ローマ人が特別品と呼んでいたカエサルの寵童のひとりである。

六〇 カエサルが十分に戦備を整えてから、クレオパトラに戦いを宣し、アントニウスから彼がこの女に譲った支配権を剝奪する決議が通過した。カエサルはさらにアントニウスは毒薬のために本心を失っているし、宦官のマルディオオンとポテイノス、クレオパトラの髪結女のエイラスとカルミオンが政治の大事を司っているのだから、ローマ人はこれらのものと戦うのだと言った。

さて戦争の前兆として次のようなことが起ったと言われる。アントニウスが植民したアドリア海岸の都市ベイサウラは地割れによって吞まれた。またアルバの付近にあったアントニウスの石像のひとつから何日も汗が出て、人々が拭いても止まらなかった。さらにアントニウスがパトライに滞在しているときに、ヘラクレスの神殿が落雷によって焼失し、またアテナイにある巨人の戦いからも、ディオニソスが風にもぎとられて劇場にはうり出された。ところでアントニウスは自分の家系をヘラクレス

- (1) ポテイノスは「カエサル伝」四八以下によるとカエサルに殺されている。
- (2) このふたりの女はクレオパトラと最後を共にしている。木伝八五。
- (3) アクロポリスの南の壁にベルガモン王アッタロス一世が奉獻した群像の

スに、生活様式は前にも述べたように、ディオニソスに結びつけ、「新しいディオニソス」と呼ばれていた。さらに同じ暴風がアテナイにある多くの巨像の中からアントニウスの名を刻んだエウメネスとアッタロスのだけを倒した。またアントニウスと呼ばれたクレオパトラの旗艦にも恐ろしい前兆が現われた。というのは燕の群れが艦に巣をつくっていたが、別の燕の群れが襲来して前のを追い出し、雛を殺した。

六一 さてアントニウスのもとに戦いのために集結した軍勢は、戦艦が五百隻を下らず、その中には多くの八段櫓船や十段櫓船があつて、豪華に、祭礼のように飾つたものもあり、歩兵は十萬、騎兵は一萬二千を数えた。また共に戦つた属国の王にはリビアのポッコス、上キリキアのタルコンデモス、カッパドキアのアルケラオス、ハフラゴニアのフィラデルフォス、コンマゲネのミトリダテス、トラキアのサダラスがいた。これらの王は自身出陣し、ポントスのポレモン、アラビアのマルコス、ユダヤ人のヘロデス、それにルカオニア人とガラテア人の王アミュータスは軍隊を送り、メディア人の王からも援軍が派遣された。他方カエサルの方は戦艦が二百五十隻、歩兵が八萬、騎兵は敵とほぼ同数であつた。アントニウスはエウフラテスとアルメニアからイオニア海とイリリクムまで支配し、カエサルはイリリクムから西のオケアノスに至り、またオケアノスから逆にティレニア海とシシリー海を勢力下においた。リビアに關しては、イタリヤ、ガリア、ヘラクレスの柱までのイベリアの対岸に當る地域はカエサルが確保し、キュレネからエチオピアまでの部分はアントニウスが掌握した。

六二 ところでアントニウスは全く女に牛耳られていたので、陸軍が遙かに優勢であつたにもかかわらず、クレオパトラに従つて海軍を主力としたが、しかも彼は乗組員の不足から三段櫓船の艦長たちは「既に長く苦しんでいた」ギリシアから旅行者や驛馬の馬方や収穫の工夫や成人に達した若者たちを駆り集めても船がいっぱいにならず、大部分の軍艦は乗組員が不足して頼りない航海をしていることを知っていた。他方カエサルの方は高さや重さを誇示するために建造したのではなく、操作が容

易で速力があり、乗組員を厳密に充たした艦隊をタレントウムとブルンディウムに集結し、使いをアントニウスに送つて、時を空費しないで、軍勢をひきいてやつて来いと要求し、カエサル自身の方はアントニウスの艦隊が妨害されずに碇泊地や港に入ることを許し、アントニウスが安全に上陸して設営するまで、自分の方は陸兵を海岸から騎馬で一日行程だけ後退させておこうと言つた。この大言壮語にアントニウスもしつべ返しをして、彼はカエサルより年長だが一騎打をしようと思つた。それが不承知ならば、昔「前の」カエサルとポンペイウスが行なつたように、ファルサロス付近で堂々と決戦を交えようと促した。さてアントニウスは今ニコポリスのある場所であるアクティオン付近に碇泊している間に、カエサルは機先を制してイオニア海を渡り、トリューネ¹と呼ばれるエペイロスの地点を占拠した。そこでアントニウスと彼の友人たちは、自軍の歩兵がはなれておるので落ち着かないでいると、クレオパトラは嘲つて「カエサルが杓子の上に腰かけているのが、何で恐ろしいのです」と言つた。

六三 しかしアントニウスは夜明けに敵が追航してくると、戦闘員の乗り組んでいない艦船が捕獲されるのを恐れ、漕手を武装させて、見せかけに甲板に列べ、また船の櫓を持ちあげて両側に配置し、アクティオン付近の湾口に敵に直面して船首を揃え、あたかも乗組員が充員され、戦闘の用意ができていような様子を見せた。そこでカエサルもこのような謀略に欺かれて退却した。アントニウスはまた周囲の土地に水が少なく、水質もよくないので、飲水のある所に何か困いをめぐらし、敵に使用されないようにした点も、うまい計略だと思われた。ドミティウスに對してもクレオパトラの判断に従わず、寛大な態度をとつた。この男は既に発熱していたのに小舟に乗つてカエサルの方に移つたので、アントニウスは大いに憤慨したが、それでも荷物全部を彼の友人や召使ともども送り届けてやつた。そこでドミティウスは自分の不信と裏切りが露見したので後悔したかのように、まもなく死んだ。

王たちの中でもアミュータスとディオタロスはカエサルの方に寝返り

を打つた。また海軍もやることなすこと手違いつづきで、どの救援も手遅れだったので、アントニウスは再び陸軍を頼みとすることをよぎなくされた。陸軍の司令官カニディウスも危険を目の前にして考えを変え、クレオパトラを送り帰してトラキアまたはマケドニアに退いて陸戦で勝

敗を決するようにと進言した。それというのでもゲタ人の王ディオユメスは大軍をもつて救援することを約束し、シシリー近海の戦争で腕を磨いたカエサルに海上権を委ねるのは恥辱ではないが、陸戦にかけては最も経験を積んだアントニウスがこれほど多くの軍隊の戦力と装備を活用しないで、それらを軍艦に配分して勢力を浪費するのは不可解であると説いた。

それでも結局、クレオパトラの主張が勝つて軍艦で戦争を決することになったが、実のところ既に逃走を思案し、自分の軍隊の配置にも勝利を得るのに役立つ地点よりも、敗戦の際に最も容易に逃走できる地点を選んだ。さらに陣營から碇泊地に至る長壁があつて、そこをアントニウスはいつも危険を心配しないで通つていた。ところがひとりの奴隷がカエサルにアントニウスが長壁の間を海の方へ下つて行く途中で捕えることができるかと告げたので、伏兵を送つた。彼らはもう少しで目的を達するところであつたが、跳びかかるのが早すぎたためアントニウスの先導兵を捕えただけで、アントニウス自身は辛うじて脱走した。

六四 さて海戦を行なうことに定めてからアントニウスは六十隻だけ残してエジプトの船を焼き払い、最も優秀で大きな船には三段櫓船から十段櫓船まで含めて、二万人の重装兵と二千人の弓兵を乗せさせた。この際のことであつたと伝えられているが、それまでアントニウスのためには何度か戦い、身体中、傷だらけになつた歩兵隊長のひとり、アントニウスが通りかかった折に泣き出して「インペラトルはどうしてこんな傷や剣を無視して、ろくでもない木¹葉船を頼りになさるんです。海の戦いはエジプト人やフェニキア人にやらせておきやい、いでしょう。われわれにはいつも踏みしめている陸地で死ぬか、敵に勝つようにさせて下さい」と言つたさうである。これに對してアントニウスは一言も答えず、

ただ手ぶりと顔つきでその男に元氣を出せと激励しただけで通り過ぎたが、彼自身も大して希望をもつていなかったのか、船長たちが帆は残しておきたいと言つたのに、船にのせてもつて行けと命じ、敵が逃げた場合はひとりも逃げ延びさせてはならないと言つた。

六五 さてその日とそれに続く三日間は大風のため海が波立って、戦闘を妨げたが、五日目には風がおさまり海が穏やかになつたので両軍とも行動を開始し、アントニウスとプブリコラは右翼を、コエリウスは左翼を、マルクス・オクタウィウスとマルクス・インステイウスは中央をひきいた。他方カエサルは左翼にアグリッパを配置し、彼自身は右翼を保留した。陸兵はアントニウス方はカニディウスが、カエサル方はタウルスが指揮し、海岸に對峙して満を持していた。さて指揮官たち自身のうちアントニウスは小舟であちこちの艦船を訪ねて廻り、兵士たちには船が重いから陸地にいるようなつもりで沈着に戦えと激励し、また船長には船が投錨しているかのように敵の攻撃を迎えて湾口の攻め難い持場を守れと命じた。他方カエサルは未だ夜も明けないうちにテントを出て、船を訪ねようとして動き廻っていると、驢馬を駈してくる、ひとり

の男に出会つたので名前を尋ねると、その男はカエサルを知つていて「私の名前は幸男で、驢馬の名は勝というんですが」と言つたさうである。そこでカエサルは後にその場所を船の衝角で飾り、驢馬と男の銅像を建てた。さてカエサルは残りの艦隊を査閲して小舟で右翼に向うと、

(1) 本伝四および二四。

(2) クレオパトラは「新しいイシス」と呼ばれた。本伝五四。

(3) 円盤形と考えられた当時の世界の周囲を潮流をなしてとりまいてる外洋。

(4) 現在のジブラルタル海峡。

(5) エウリピデス『ヘラクレス』一一五〇、英雄ヘラクレスの苦難になぞらえて引用されている。

(6) この地名は煮ものをする時の木の杓子の意味をもつのでクレオパトラがもじつた。

狭い湾口に敵が静止しているのを見て驚いた。その敵艦の光景は投錨しているようであったからである。そこでカエサルはこのことを長い間思いついて味方の船を敵の船から約八スタディア（約二百四十メートル）離しておいた。その時は第六つになつてしたが、風が海の方から起つたため、アントニウスの兵士たちは辛抱して時を稼ぐことができなかった。自分たちの船の大きさを無敵なものと思ひにして左翼を動かさし始めた。これを見るとカエサルは喜んで味方の右翼を艦の方向に漕がせ、敵艦を湾と狭い口からもつと外の方におびき出そうとし、操作の容易な味方の船で包囲し、大型なのに乗組員が少ないために、動きがのろく、操縦し難い敵艦に近接戦を始めた。

六六 さて接戦が始まったが、船どうしの衝角の撃突も破壊も行なわれなかつた。それとどういふのもアントニウス側の船が重い。衝角の撃突を特に有効にするだけの速度がなかつたためであり、他方カエサル側の船は青銅で強固に武装された敵船の衝角に正面からぶつつかつたからである。それに衝角の方も大きな角材を鉄で互いに接合して建造された船に撃突すると毀れ落ち易いのである。そこで戦鬪は陸戦、一層本当に言うところ攻城戦のようになつた。実際に「カエサル側の」船が、三、四隻も同時にアントニウス側の一隻くらいを攻撃し、兵士たちが盾と槍と投槍と火矢を使うと、アントニウス側の兵士たちは木の櫓から器械によつて矢と石を打ち出してゐた。

アグリッパは敵を包囲しようとして左翼を展開したので、ブブリコはこれと対抗することを強いられて中央から離れて進んだ。それらの船が混戦状態となり、アルンティウスの艦隊もともに戦つたが、海戦はなお勝敗が定まらず、伯仲の形勢であつたので、突然クレオパトラの船六十隻が帆をあげて脱走し、交戦してゐるものたちの真中を通り抜けて逃げ去つた。それは大きな艦船の後に配置されてゐたので、その間を抜け逃げようとして混乱を起したのである。それらの船が風を利用してペロポネソスの方向に向うのを見て敵側は驚いた。しかもこの際アントニウス

集まりはじめ、艦隊は全滅したが、陸兵はなお持ちこたえてゐると思つたと報せた。そこでアントニウスは伝令をカニディウスに送り、できるだけ早く軍隊とともにマケドニアを經由してアジアに撤退するように命じ、アントニウス自身はタイナロンからリビアに渡るつもりなので、一艘の運送船を選び、それに多額の貨幣と王家の貴重な金銀の什器を積んで、友人たちに共同に贈り、それを各自分配して身を安全にするよう勧めた。友人たちは贈物を辞退して涙ぐんでゐると、アントニウスは非常に親切に親愛の情をもつて彼らを慰め、懇願して去らせ、コリントスにいる彼の執事テオフィロスに、これらの人々がカエサルと和解ができるまで安全を計つて、かくまつてやれと、手紙を書き送つた。このテオフィロスはヒッパルコスの子で、そのヒッパルコスはアントニウスの身内でも最も勢力があつたが、解放奴隷の中では最初にカエサルの方に移り、その後はコリントスに住んでいたのである。

六八 さてこのようなことがアントニウス側の状況であつた。アクティオンではその艦隊は長時間カエサルに抵抗したが、真向から押し寄せてくる高波にひどく傷めつけられて、第十時にやつと戦鬪を断念した。カエサル自身の書き記すところによると、死者は五千、拿捕された船は三百隻に達した。アントニウスの逃走に気づいた者は少数で、それを耳にした者も最初の中は不敗の歩兵一萬九千と騎兵一萬二千を残してゐながら、あたかもこれまでたびたび、運不運を体験して、無数の戦鬪や戦争の変転によつて練成されたことがなかつたかのように退去したという話は信じられなかつた。兵士たちもアントニウスがやがてどこからか姿を現わすだろうとの空願みと期待を抱いて、絶大な信頼と勇気を示したので、逃走が明白になつてからも七日間もちこたえ、カエサルが送つた使いの者をも相手にしないでゐた。しかしついに彼らの將軍カニディウスが夜陰に逃亡して陣營を放棄したので、何もかもなくなり、指揮官たちも裏切られて、勝者の側についた。

そこでカエサルはアテナイに航行してギリシア人と和解し、金も奴隷も駄獣も奪われて惨めな状態になつてゐた諸都市に、戦後に余つた穀物

は指揮官らしくも、男らしくもふるまわず、いや絵じて自分自身の判断を用いず、ある人が戯れに「愛人の魂は相手の身体の中に生きてゐる」と言つたように、女に引きずられて同体となり、一緒に動くようになつてゐることを明らかにした。それというのも、クレオパトラの船が脱走したと見るや否や、何もかも忘れて彼のために戦い、死んでゐる人々を裏切つて脱走し、五段機船に乗り移つてシリア人のアレクサスとスケリウスだけを連れて、既に彼を破滅させた上に、さらにことごとく破滅させようとする女の尻を追いかけた。

六七 クレオパトラはアントニウスだと知ると船から標識をあげたので、アントニウスはやつてきてクレオパトラの船に迎え上げられたが、クレオパトラを見もせず、見られもせず、独りで船に出て無言のまま腰を下し、両手で頭をかかえていた。そうしてゐる中に数隻のリブルニア風の船がカエサルの方から追跡してくるのが見かけられたので、アントニウスは船の軸を敵船の軸の方に向き返させ、それらの船を追つ払つたが、スパルタ人エウリュクレスの船だけは激しく肉迫し、甲板の上で槍を振りかざし、アントニウスをめぐつて投げつけようとした。そこでアントニウスは軸に立つて「アントニウスを追いかける者は誰だ」と尋ねると、「おれはラカレスの息子エウリュクレスだ。カエサルの武運にあやかつて父の死の仇討ちに来たのだ」と言った。ラカレスは掠奪の罪状を問われ、アントニウスによつて斬首されたのであつた。しかしエウリュクレスの槍はアントニウスの船にあたらず、二隻いた他の旗艦に青銅の衝角を撃突して、それを回転させ、横向きになつたところを拿捕し、さらにもう一隻、豪華な家具を積んでゐた船をも鹵獲した。エウリュクレスが立ち去ると、アントニウスはまた同じ恰好で坐つたまま身動きしなかつた。こうしてアントニウスはクレオパトラに対する怒りからか、彼女に会ふのを恥じたためか、三日間そのまま船で過し、タイナロンに入港した。ここでクレオパトラの侍女たちがふたつたりを説きつけて、まず会つて話を交させ、それから食事と睡眠を一緒にさせた。

やがて少なからぬ運送船と数人の友人が敗戦の場からふたつたりのもとに

を分配した。とにかく、私の曾祖父のニカルコスがよく話してゐたところでは、同郷の市民たちはひとり残らず、鞭でせき立てられながら肩にいられ、そしてこのようにして一荷を運んで、二回目も既に量られて正に出発しようとしてゐるところに、アントニウスが敗れたとの報せがきこえて、このことで都市は救われた。アントニウスの役人や兵士たちがだちに逃げ去つて、市民は自分たちで穀物を分配したからである。

六九 さてアントニウスはリビアに到着してクレオパトラをバライトニオンからエジプトに送り、彼自身は全く外部との交渉を絶ち、ただふたりの友人とぶらつき廻るのを楽しんでゐた。そのひとりにはギリシア人の弁論家アリストクラテス、いまひとりにはローマ人のルキウスで、この方は私が別の巻でも記したように、フィリッピ（の戦い）でブルトウスを逃がすために彼自身がブルトウスだと言つて追手に降伏したが、そのためにアントニウスに助けられて、最後の時までアントニウスに忠実で変らない態度をもち続けた。ところがリビアにいる軍隊を託されていた將軍が離反したので、アントニウスは自殺を図つたが、友人たちに妨げられてアレクサンドリアに連れて来られると、クレオパトラが途方もない大事業に敢えて着手してゐるのを発見した。それは紅海をエジプト側

(1) 日出から日没までの時刻を十二に分けた第六時なので、ほぼ正午に当る。
(2) カエサル側の中央を指揮した將軍。むしろ六五でその名をあぐべきであつた。

(3) 「カト」九。

(4) アドリア海北東岸地方で最初に使用された細長い軽快な船。

(5) このページ註(1)の計時法に従つて午後四時頃に當る。

(6) ポイオティアの北西部に位するカイロネイア、ブルタルコスも同市の出身である。

(7) 「ブルトウス伝」五〇。

(8) 紅海はヘレニズム・ローマ時代には現在の紅海だけでなく、インド洋*

の海から分つてアジアとリビアとの境になつてゐる地峡で、両方の海が最も迫つて幅がいちばん狭く三百スタディオシかない地帯に艦隊を海から揚陸して、船を陸上を牽引して横断させ、それを多くの財物や軍隊とともにアラビア湾に進水させ、エジプトの外側に移住して屈従と戦争を逃れようと企てていたのであつた。しかし最初に引き上げた数隻の船をベトラの付近に住むアラビア人が焼き払い、アントニウスはまたアクティオンにゐる軍隊がまだもちたえてゐると思つていたので、クレオパトラも計画を止めて、敵の侵入口を防衛した。しかしアントニウスはアレクサンドリア市も友人との交際も見ずして、ファロス島の付近の海の中に防波堤を築いて、海上の住居を自分のために造り、人々から離れてそこに亡命者として住み、ティモンと同じような体験を味つたからその生活を慕い、まねてゐるのだと言つた。彼自身も友人たちの不正と忘恩のあしらいをうけたところから、すべての人間に信用がもてなくなり、嫌氣を感じたからである。

七〇 ところでこのティモンといふのはアテナイの人で、アリストフアネスとプラトンの劇から推測するとペロポネソス戦争の頃、男盛りになつてゐた。それらの劇では彼は氣難しい、人嫌いと言われ、人づきあいを全く避け拒んでゐたが、若くて向う見ずのアルキビアデスは歓迎して好んでくちづけをしてゐた。そこでアベマントスがふしぎに思つて、その訳を尋ねると、あの青年を愛してゐるのは、やがて彼がアテナイ人たちにとつて大きな禍いの原因になることを知つてゐるからだと言つた。このアベマントスだけはティモンに似ており、その生活を真似ていたので、時折來ることを許されてゐたが、コエスの祭りの日にふたりだけで酒盛りをしてゐたとき、アベマントスは「われわれの饗宴は何と楽しいことよ」と言つたと、君がいなければね」とティモンは言つた。またアテナイ人が民会に集まりをしてゐるとき、ティモンが演壇に上つたので、珍らしいことだと静肅にして大いに期待してゐると、次のように言つたといふことである。「アテナイ人諸君、私には小さな地所があつて、そこには無花果の木が生えてゐる。その木で既に多くの市民が首を吊つた。

試すために死刑囚に服用させた。ところですぐに死ぬ毒薬は苦痛によつて死に方が激しく、他方穏やかな毒薬は時間がかかるのを見て、毒をもつ動物が互いに咬み合うところを実験し、自分で観察した。それを毎日行なつてゐるうちに、ほとんどすべての中で、アスピスという蛇が咬んだのは、^{瘧疾}瘧疾や苦悶をひき起さず、睡眠と顔の軽い発汗をもたらすだけで、感覚が容易に麻痺して減退し、あたかも熟睡してゐる人の場合のように、呼び起して目覚めさせることが難しくなるといふことを発見した。

七二 それと同時にクレオパトラとアントニウスはアジアにゐるカエサルに使節を送り、クレオパトラは彼女の子供たちのためにエジプトの統治権を請願し、アントニウスはエジプトでは不都合ならば、アテナイで一人人としてくらしたいと懇願した。しかし友人たちは脱走してゐなくもなり、他に信頼できる者もなかつたので、子供たちの教師のエウフロニオスが使節として送られた。実のところラオディケイアの人アレクサスはローマでティマゲネスの紹介によつてアントニウスに知られ、ギリシア人の中では最も勢力を得たが、クレオパトラがアントニウスを抱きこむための急先鋒の手先となり、アントニウスの心に萌したオクタウィアに好意をよせる思慮をひるがえさせたが、ヘロデス王の離反を阻むために遣わされたまま、そこに留まつてアントニウスを裏切り、ヘロデスをあてにして厚顔にもカエサルの面前に出頭した。しかしヘロデスは彼を助けようとせず、アレクサスは直ちに捕えられて自分の祖国に送られ、そこでカエサルの命令によつて殺された。このようにしてアレクサスはアントニウスのまだ存命中に不信の裁きをうけた。

七三 さてカエサルはアントニウスのための考慮には耳を藉さなかつたが、クレオパトラには返答を送つて、アントニウスを殺すか、追いつくならば、それ相当な処遇をうけないことはないと言つてやつた。カエサルは使節とともに自分の側近から解放奴隷のひとり、テュルソスを遣わしたが、この男ならば見識もあり、美を重んじることにかけては尊大で驚嘆すべき女に対して、若い將軍からの伝言を納得させるよう語ることができようと考えた。この男が他の使いよりも長い時間クレオパトラと

ところで私はその土地に家を建てようと思つてゐるから、もしも諸君の中で首くくりを希望の人があつたら、無花果の木を斬る前にやつてくれるよう公けに予告しておく。」ティモンは死んで、ハライの海岸に葬られたが、墓の前の海岸が陥没して波がそれをとりまいて、その墓に人が近づけないようにした。その墓碑銘は次のようであつた。

「ここに私は荷厄介な生命を絶つて横たわつてゐる。」

この碑銘は彼の存命中に作つておいたものといわれているが、広く知られてゐるのはカリマコスの作である。

「人間嫌いのティモンがこの下にいる。とつとつと行つてくれ。」

たつぷり呪い言を吐いたら、すぐにも行つてくれ。」

七一 こういつたことがティモンについての多くの逸話の中の少しばかりである。さてアントニウスのもとにはカニディウスが自身でアクティオンにいた軍隊の喪失を報告しに來たが、いくつかの軍団や大隊をもつていたユダヤ人のヘロデスもカエサルの方につき、他の王侯も同様に離反してエジプト外には一兵も残つてゐないことを聞かされた。しかしこれらの報道でアントニウスは少しも心をとり乱さず、希望を快く棄て去つて心の煩いをもとり去らうとしたかのように、ティモン風と名づけた海の住居を後にして、クレオパトラを迎えられて王宮に入り、市民を食事と酒宴と贈物に招き、クレオパトラとカエサルの息子を成人のリストに書きこみ、フルウィアによつてもうけた子アンテュルルスに紅い縁のつかないトガを授け、その祝いでアレクサンドリアでは多くの日数、饗宴と乱舞と祭りがつづいた。アントニウスとクレオパトラはかの「真似のできな生活人」のクラブを解散し、それに劣らず趣のある、豪華で贅沢な別のクラブを作り、「死を共にする人々」のクラブと名づけた。といふのは友人たちは一緒に死ぬ者としてそのクラブに登録され、もち廻りの宴会で愉快に時を過した。さらにクレオパトラはさまざまな致命的な効きめのある毒薬を集めて、そのひとつひとつの苦痛のない作用を

会見して特別の待遇を受けたためアントニウスに疑念を起させ、アントニウスはテュルソスを捕えて鞭で打ち、それからカエサルのもとに返す際に手紙を書いて、自分が不幸のために怒りつぱくなつてゐるところにこの男の威張つた、人をさげすむ態度に腹を立てたと言ひ、「しかし君がこのことを承服しかねるなら、私の解放奴隷ヒッパルコスを差し上げるから、これを吊上げて答で打てば同じになるわけだ」と記した。そこでクレオパトラはこの非難と疑念を解くために精いっぱい、アントニウスにかしずいて、彼女自身の誕生日には質素に、現在の境遇にふさわしく祝い、アントニウスの誕生日には質素に、現在の境遇にふさわしく祝ひ、宴會に招かれた人々の多くは貧乏人としてやつてきたのが、金持になつて帰る有様であつた。ところでアグリッパはローマからたびたびカエサルに手紙を書いて当地の情況からカエサルが帰つてきてゐることが切望されると言つてやつた。

*を含め、広く南海を指すが、ブルタルコスではシナイ半島の東に灣入してゐる海域を意味してゐる。

(1) 地中海を指す。

(2) アレクサンドリアの北西に七スタディオンの突堤で陸地と接続した島。世界七ふしぎのひとつに数えられた大燈台が北東部にあつた。現在は全く陸続きとなつてゐる。

(3) アリストファネス『鳥』一五四九、「リュシストラテ(女の平和)」八〇。

(4) 前五―四世紀のアテナイの喜劇作家。哲學者とは別人である。

(5) 「アルキビアデス伝」一六。

(6) 「酌器の祭」の意で、アッティカで早春に行なわれる「花の祭」(アンテステリア)の第二日に新しくディオニスに献げられる祭。

(7) toga villicus. ローマ人の白い上衣。貴族の未成年者、結婚前の娘や公式の席に高官が着用した紅い縁のついたトガ toga praetexta と対比される。カエサリオンはギリシア人として、アンティルスはローマ人として教育された。

七四 そこで、戦争は自分の間延期されていたが、冬が終るとカエサルはシリアを、部将たちはリビアを経て進軍した。ペルシオンが陥ると、セレウコスがそれを放棄したのはクレオパトラの同意の上だという噂がひろまった。しかしクレオパトラはセレウコスの妻と子供たちをアントニウスに引き渡して殺させ、彼女自身はイシス神殿の側に美麗と荘厳を極めた墳墓と記念碑を建造させていたが、そこに最も貴重な王家の宝物、金、銀、エメラルド、真珠、黒檀、象牙、肉桂をよせ集め、それらすべての上に多量の炬火の燃木や麻屑を積んだので、カエサルはそれらの財宝のことを心配し、クレオパトラが絶望に走ってその財宝を焼き尽してしまわないように、絶えず彼女に何か好意的な希望を送り、同時に軍隊をひきいてアレクサンドリアを目指して進軍した。さてカエサルが饒馬場の付近に陣營を設けると、アントニウスは出撃して花々しく戦い、カエサルの騎兵隊を敗走させ、その陣營まで追撃した。そこでこの勝利によって意気揚がり、王宮に入って武装をしたままクレオパトラにくちづけして、兵士の中で最も勇敢に戦った男をクレオパトラに指し示した。クレオパトラはその兵士に武勲のしるしとして黄金の胸当てと兜を授けた。その男はそれを受け取って、夜の間にカエサルの方に脱走した。

七五 アントニウスはカエサルに使いを送って一騎討を申し入れた。しかしカエサルはアントニウスに死ぬ道がいくらでもあると返事したので、アントニウスは戦死よりもよい死に方はないと自覚して海陸から一斉に攻撃をする決心をした。食事の際に彼が奴隷に平素よりもたっぷりと酒をつぎ、よくもてなしてくるよう言いつけたと伝えられているのは、奴隷たちが明日もそうすることができると、それとも別の主人に仕えて、彼自身は死んで横たわり、ミイラとなって無に帰するかいづれともわからないからである。友人たちがそのことを聞いて涙を流すのを見て、アントニウスは彼自身は戦闘において安全や勝利よりも名誉の死を求め、から連れて行かないと言った。

その夜、殆んど真夜中の頃、アレクサンドリア市〔民〕はこれから起ることの危惧と予感でひっそりと心が沈んでいると、突然すべての種類殺した。彼が足下に倒れるとアントニウスは「でかした、エロス、お前は自身ではできなかつたが、為すべきことを私に教えてくれた」と言つて、腹を突き刺して寝台に倒れた。しかし傷はすぐに生命とりにならなかつた。そこで横になつた後、血の流れが止まつてから正気を取り戻して、側にいる人々に止めを刺してくれと頼んだ。しかし人々は叫び、苦悶している彼をそのままにして室から逃げ出したが、その後でクレオパトラのところから秘書官のディオメデスが来て、アントニウスを墓の中にいるクレオパトラのところにつれて来るようにとの命令を伝えた。

七七 そこでクレオパトラが未だ生きていると知って、家来たちに彼の身体を抱き起すように命じ、人々の手によつて墓の戸口まで運ばれた。しかしクレオパトラは扉を開かず、窓から姿を見せて、そこから綱と紐とを下ろさせた。それで縛られたアントニウスをクレオパトラ自身とただふたり、彼女と墓に入らせていた女たちが引つ張り上げた。それ以上惨めな有様はなかつたとは居合せた人々の語るところである。というのはアントニウスは血まみれになり、死に瀕していながら、両手をクレオパトラの方にあげ、宙ぶらりになつていたからである。女たちにとつてその仕事は容易なことではなく、クレオパトラも両手に力を入れて、顔を硬ばらせて綱を引つ張り、下に居る人々は彼女と声をかけて励まし、労苦を願つた。このようにしてアントニウスを迎え入れて横に寝かせる

と、クレオパトラは自分の着衣を剥ぎとつてアントニウスにかけ、両手で自分の胸を打つて、かきむしり、アントニウスの顔の血を拭いながら主人とか夫とかインペラトルとか呼び、彼の不幸を憐れむのあまり、彼女自身の不幸はほとんど忘れていた。しかしアントニウスは彼女の嘆きを止めさせて、葡萄酒を飲むことを求めたのは、咽喉が渴いでいたためか、それとも一層早く苦しみを逃れたいと望んだためであろう。飲んでしまつたアントニウスはクレオパトラに、もし恥辱が伴うことがなければ、彼女の身の安全を図るために、カエサルの友人たちの中でもとりわけプロクレイウスに依り頼むように勧め、アントニウスの最後の非運を嘆かず、彼がこれまでにいい目に会つてきたこと、最も著名で有力な

の楽器の調子の揃つた音とまたお祭り騒ぎのやかましい行列が練り歩くようにパッサカスの浮かれ騒ぎとサテュロスの踊りを伴つた民衆の叫びが聞かれ、その行列は何かひとつとなつて市の中心を通つて敵の方に向つて行つたといわれている。このしるしを判断した人々はアントニウスが常々その真似をしようと努め、身近に鎮座させていた神が彼のものとから去つて行くのだと考へた。

七六 夜が明けると、アントニウスは自身で歩兵をアレクサンドリア市の前の丘の上に配置し、艦隊が出港して敵艦隊を攻撃しに行くのを眺め、それらによつて何か戦果が得られることを期待して落着いていた。ところが艦隊が敵に接近すると、橈をあげてカエサル方の乗組員に挨拶し、相手も挨拶を返すとそちら側に移り、すべての船が合体して単一の艦隊になると船を向けて市の方に漕ぎ寄せてきた。このことをアントニウスが見ると船もなく騎兵隊にも見棄てられ、歩兵隊とともに敗れて市に退却し、クレオパトラに裏切られて彼女のために彼が戦つた相手に引き渡されるのだと叫んだ。そこでクレオパトラはアントニウスの怒りと逆上を恐れ、墓に逃げこみ、かんぬきや止金で蔽重にした罫戸を下し、アントニウスのところに使いを送つて彼女は死んでしまつたと告げさせた。アントニウスはそのことを信じ、自分自身に「アントニウス、何をまだお前はぐずぐずしているのだ。運命は生命を惜しむためのただ一つ残つていた口実をも奪つたではないか」と言いきかせて、自室に入り胸当ての縮金を緩めて脱ぎながら、「おおクレオパトラよ、私は貴女を失つたことを悲しむはしない。すぐに私は貴女と同じ処に行くのだから。しかし誉れ高いインペラトルの私が勇気において女に劣つたと見られるのは無念だ」と言つた。

さてアントニウスの忠実な奴隷にエロスという名のものがいた。この男にアントニウスはずっと前から、いざという時には自分を殺せと言いつけておいたので、その約束を果してくれと頼んだ。そこでその男は剣を抜いてアントニウスを打つかのように振り上げたが、顔をそ向けて自人物となつて、今やひとりのローマ人としてひとりのローマ人から不名誉でなくうち負かされたことを幸せだと思つてくれと言つた。

七八 アントニウスが絶命したばかりのところへ、カエサルのところからプロクレイウスがやつてきた。その訳は、アントニウスが我と我が身を刺してクレオパトラのもとに運びこまれた後、彼の護衛兵のひとりのデルケタイウスという者がアントニウスの短剣を取つて隠したまま脱走し、カエサルのもとにかけつけ、真先にアントニウスの最後を報せ、血のついた剣を見せたからである。カエサルはそれを聞くと、テントの奥に引きこもつて、かつては自分の縁戚で、共同で統治し、多くの戦いや事業を共にした男のために涙を流した。それから手紙をとり出し、友人たちを呼び集めて読みあげ、自分は善意で、正しいことを書いてやつたのに、アントニウスの返事ときたら、いつも無礼で思いあがつていたことを立証した。その後プロクレイウスを使いに出し、他のことはともかく、何とかしてクレオパトラを生きたまま捕えて来いと命じた。それと、何とかがしてクレオパトラを生きのまま捕えて来いと命じた。それと、この女王を引き廻せば、榮譽を大いに加えると考えたからでもあつた。ところでクレオパトラの方はプロクレイウスの手で連行されることを好まなかつた。プロクレイウスは墓に到着し、地面に接した扉のところからクレオパトラと話し合つた。扉は蔽重に閉ざされていたが、声は通じたからである。そこで彼らは言葉を交わし、クレオパトラの方は子供たちのために王国を保持することを求め、プロクレイウスの方は彼女が元氣を出して、万事カエサルを信頼するよう勧告した。

七九 プロクレイウスはその場所を検査してカエサルに報告すると、ガルスが再びクレオパトラと会谈するため遣わされ、扉の所に来てわざと会谈を長引かせた。その間にプロクレイウスは梯子をかけて、女たちがアントニウスを迎え入れた窓から中へ入りこんだ。そしてすぐにクレオ

(1) 前三〇年八月一日。

(2) 火葬の時に一緒に焼いてしまひはしないかとの気がかり。

パトラが立ってガルスのことを聞いていた扉の方にふたりの召使をつれて下りて行った。そこでクレオパトラと一緒に閉じこもっていた女のひとりが「お可哀そうにクレオパトラさま、貴女は捕虜になられた」と叫んだので、クレオパトラは振り向いてプロクレイウスを見かけると、急いでわが身を刺そうとした。たまたま盗賊が使うような短剣を帯につけていたからである。しかしプロクレイウスは急いで駆け寄って両手でクレオパトラを抱き止め、「ああクレオパトラさま、貴女は御自身にもカエサルにもまらかったことをなさろうとしています。カエサルが大きな好意を示す機会を奪い、最も寛大な將軍に信義も慈悲もないという汚名を着せることになるのです」と言った。それと同時に彼女から短剣をもぎとり、毒薬を隠してはいないかと着物をふるった。さらにカエサルのところから解放奴隷のひとりエパフロデイトスが送られ、クレオパトラを生かしておくように厳重に監視し、しかし他の事は安楽に快適にさせておくようにと言いつけた。

八〇 さてカエサル自身はアレクサンドリア市に乗りこみ、哲学者のアレイオスと会談し、彼に右手を差し伸べたのは、アレイオスはただちに市民の間でぬきんでたものとして、彼自身が示した深い尊敬によって感嘆させるためであった。体育修練所に入って、設けられた演壇に登り、人々が恐怖にうたれて平伏していたので、カエサルは立ち上れと命じて、民衆には全く罪がないと告げ、その理由は第一にこの市の建設者がアレクサンドロスであること、第二にこの市の美観と大規模に感嘆したこと、第三に親友のアレイオスに好意を示したことをあげた。アレイオスはこのような尊敬をカエサルから受け、他の人々にも赦免を願ってやった。その中のひとりのフィロストラトスは即興演説にかけてはその当時のソフィストの間で最も有能であったが、不当にもアカデミア派に属するの願いを聴き届けなかった。するとフィロストラトスは長い白髯を生やし色色の着物をまといアレイオスの後にくっついて

「賢人は賢人ならば、賢人を救うものだ」

八三 数日経ってから、カエサル自身がクレオパトラに会いに来て慰めた。クレオパトラはたまたま憐れなままでベッドに横になっていたが、カエサルが入ってくると、下着だけで飛び出してその足もとに伏し、頭も顔もひどくとり乱して声は慄え、目は泣きはらしていた。胸中の傷手もはつきりと外面に現われ、要するに身体の具合も心と同じようによくなかった。それでもあの魅力と美貌の自信はすっかり消え失せてはいず、このようなきまにあっても、どこか内から輝き出て顔の動きに現われた。カエサルが彼女に横になれと勧め、彼自身も側に腰をかけるとクレオパトラは弁解めいたことを始めて、これまでの行為はアントニウスに強制され、恐れたことだとしたが、彼女にカエサルが一々反証をあげて論駁すると、すぐさま調子を変えていかにも生命に執着しているかのように憐れみを請うた。終りに彼女は自分の財宝の数を書きあげた表をカエサルに差し出したが、執事のひとりのセレウコスという者がクレオパトラは財宝の一部を抜き取り隠していると証拠をあげて言うと、クレオパトラは跳び起きてこの男の髪を掴んで顔を何度もなぐった。カエサルは笑いながら彼女を止めると、クレオパトラは「ああカエサルよ、なんて恐ろしいことでしょう。あなたがせつかく私のところまでおでましになり、こんな有様の私に声をかけて下さっているのに、奴隷たちが私をなじって女の飾りを少しり除けておいたと言いつけるのです。惨めな私には不要なものです、僅かでもあなたのオクタウィアやリウィアに差し上げて、あの方々のとりなしで、あなたから一層情深く、お手柔らかにして頂くつもりだったので」と言った。こういうことを聞いてカエサルはクレオパトラがたっぷり生命を惜しんでいると思つて喜んだ。そこでカエサルはそれらのものは彼女に任せておき、他のものも彼女が期待するよりもっと好いようにとり計らおうと言つて立ち去り、彼女を欺いたつもりであったが、実は反つて欺かれていたのである。

八四 さてカエサルの僚友の中にコルネリウス・ドラベラという名門の青年がいた。彼はクレオパトラに対して憎からぬ氣持を懐いていたが、そのとき彼女の願いを容れて密使を送り、カエサル自身は陸軍とともに

という詩を絶えずくちずさんだ。そこでカエサルはこのことを聞くと、フィロストラトスから恐れをとり除くよりも、むしろアレイオスが嫉妬をうけないようにしてやるために、フィロストラトスを赦免した。

八一 しかし、アントニウスの子供のうちでフルウィアの生んだアンテュルスは家庭教師のテオドロスに裏切られて殺され、兵士たちがその首を斬つたとき、その教師はその首のまわりにつけていた高価な宝石をとり外して、自分の帯に縫いつけた。彼はそのことを否認したが、罪状が暴露して磔刑に処せられた。クレオパトラの生んだ子供たちは傳育役の人々とともに監禁されたが、寛大なとり扱いをうけた。しかし「前の」カエサルが生まれたと言われるカエサリオンは、母が多くの財物をもたせてエチオピア経由でインドに送ったが、テオドロスと同類のいまひとりの家庭教師のロドンがカエサルが王国を与えるために招いていると言つて帰国を勧めた。しかしこのことをカエサルがアレイオスに諮問すると、

「カエサルが多くいるのはよくない」と言つたそうである。

八二 そこでこの息子は後で、クレオパトラの死後、カエサルが殺した。アントニウスについては多くの王や將軍が葬らせてくれと請願したが、その遺骸をカエサルはクレオパトラからとりあげず、彼女の手で豪華に王者にふさわしく埋葬させ、彼女の望むことはすべて許した。しかしクレオパトラは悲嘆と苦痛から——彼女の胸は叩きつづけたため炎症を起し傷ついたのであるが——発熱したので、それを好い口実にしてそのために食物をとらず、他人から妨げられずに自ら命を絶とうとした。さらにクレオパトラの側近にオリオンボスという医者がいたが、彼がこのような事柄のいきさつを明らかにして述べているところによると、クレオパトラは彼に真相をうち明け、自分が死ぬことの相談相手で協力者にし、しかしカエサルは疑念を懐き、子供たちのことに関して威嚇と恐怖を与えたので、彼女は攻城器で攻められたように屈伏し、それを望む人々の言いなりになって身体をいたわり養つた。

出発してシリアを経て進む準備をしており、クレオパトラは子供たちとともに三日後にローマへ送り出すことにしていると報せた。それを聞くとクレオパトラはまずカエサルにアントニウスの墓に酒を注ぐ式を行なうことを許してくれるようお願いして、それが聴き届けられると墓につれて行かせて、いつも傍に待てる女たちとともに骨灰の壺を抱いて言った。「おおいとしいアントニウスよ、ついせんだって私はあなたをまだ自由な手で葬りましたが、今は囚われの身で酒を注ぎ、監視されてこの奴隷の身を自分で打ったり、涙を流したりして傷めつけることもできず、あなたに勝つた凱旋式のためにとおきにされているのです。しかしもうまたと礼拝も酒を注ぐ式も期待しないで下さい。これがクレオパトラが貴方に捧げる最後のものです。私たちは生きています、何もかも私たちが互いにひき離すことができずして死に、死によつて場所をとり替え、ローマ人のあなたがここに葬られ、不幸な女の私はイタリアで、あなたの土地のほんの少しをうけることになりそうです。しかし彼の地の神々に何か力と権能があれば——この地の神々は私たちを裏切ったのですから——あなたはあなたの妻を生きたままにはっておかず、あなた自身に勝つた凱旋式に私を引き廻わせず、ここで私をあなたと一緒に隠して埋めて下さい。私に降りかかった幾千という不幸の中でも、あなたなしに生きていたこの短い時ほどひどい恐ろしい不幸はありませんでしたもの。」

(1) 実際はふしだらな生活をしていて、エビクロス派に属すると言われている。

(2) 出典は明らかでない。

(3) 「イリアス」二卷二〇四の「支配者が大勢いるのはよくない」をもじつた言葉。

(4) 単に「三日めに送る」とよむべき写本が多いが、ピサンティンの史家ツナラスの「彼女(クレオパトラ)を三日後にローマに送る」との記述に従つてテキストを補つた解釈によつて訳出した。

八五 このように嘆きの言葉を書いて墓に花冠をかけ骨灰の壺にくちづけしてから、彼女自身の入浴の用意を言いつけた。入浴をすませて食卓に向って横になり、豪華な食事をとった。そこへ田舎から籠をもったひとりの男がやってきたので番兵たちが何を持ってきたかと尋ねると、籠を開いて木の葉をとり除けて中にいっぱいしまった無花果を見せた。番兵たちはその美事で大きいのに驚嘆すると、その男は笑っていくつかとれと勧めたが、信用して運び入れさせた。食事の後でクレオパトラは既に書き認め、封をしていた書翰板をとってカエサルのもとに送り、あのふたりの女の他は皆立ち去らせて扉を閉めた。

カエサルは書翰板の封を開くと、自分をアントニウスと一緒に葬ってくれとの哀願が目についたので、すぐに何事が起ったかに気づいた。最初には自分が駆けつけて助けようと思ったが、それから大急ぎで検分の使いを送った。しかし惨事は素早く行なわれていた。使いの者たちが駆けつけて番兵がまだ何が起ったか気づかずには扉を開けると、クレオパトラは女王の服装をして黄金のベッドに横たわって死んでるのが発見された。ふたりの女のうちエイラスの方は彼女の足もとで死に、カルミオンの方ももうふらふらして頭が重くなっていたが、女王の頭のまわりにつけた王冠の形を整えていた。誰かが怒って「これはどえらいことだな、カルミオン」というと、「ええ、全くどえらいことで、それに歴代の王様の御子孫にふさわしい……」と言ったきり、他のことは口をきかず、ベッドの側に倒れた。

八六 あの無花果と木の葉で上から隠されて蛇がもつてこられたと伝えられている。クレオパトラは自分でも気づかない間に蛇が身体に巻きつくようにしておけと言いつけておいたが、無花果をいくつかとり除けるとそれを見たので、「ああここにいる」と言って、咬ませるために腕をまくったという。しかし他の説によると、蛇は水甕に隠しておいて腕だったが、クレオパトラはそれを黄金の紡錘でつづいて怒らせ、とびかかって腕に巻きつけたのだという。しかし真相は誰も知っていない。またクレオパトラが中を空虚にした櫛に毒薬を入れて、その櫛を頭の中に隠

していたともいわれている。とにかく身体の傷も他の毒薬の徴候も外面には現われなかった。それに蛇は室内では見つけれず、ただある人々はその這った痕跡をその室の窓が面していた海岸で見たという。しかしまたある人々はクレオパトラの腕にふたつかすかな、はっきりしない傷跡が見られたと言っている。カエサルもこの人々の言うことを信じたらしい。というのは凱旋式の際クレオパトラ自身の像がもたらされたが、それには蛇が巻きつけてあった。とにかく以上のようなことが事件について言い伝えられている。

カエサルの方は女王の死によって当惑したが、その立派な振舞いに感服して、その遺骸をアントニウスと一緒に盛大に女王にふさわしく葬るように命じ、ふたりの侍女も彼の指図で鄭重な弔いをうけた。クレオパトラが死んだときは三十九歳で、二十二年間女王の位にあり、アントニウスとは十四年以上、共同で統治した。アントニウスはある人々には五十六歳、他の人々には五十三歳だったと言われている。ところでアントニウスの立像は破壊されたが、クレオパトラのは彼女の友人のアルキピオスという者がアントニウスと同じめに遭わないようにカエサルに二千タラント贈ったので、それぞれの場所に残された。

八七 アントニウスは三人の女によってもうけた七人の子を残したが、最年長のアンテュルスだけがカエサルに殺され、あとの子供たちはオクタウィアが引きとって自分の子供たちと一緒に育てた。クレオパトラの娘クレオパトラはオクタウィアが王の中でも最も教養のあるユバに嫁がせ、フルウィアの生んだアントニウスをも昇進させたので、カエサルのもとにおける地位はアグリッパが第一、リウィアの子供たちが第二、アントニウスは第三であり、またそう思われた。オクタウィアがマルケルスによって生んだふたりの娘とひとりの息子のうち、息子のマルケルスはカエサルが養子で女婿とし、娘のひとはアグリッパに嫁がせた。しかしマルケルスは新婚後まもなく亡くなり、カエサルは信頼できる女婿を他の友人たちの間から選ぶことが容易でなかったので、オクタウィアはアグリッパがオクタウィア自身の娘を離別して、カエサルの娘を娶

るよう申し出た。カエサルはまずその申し出を容れ、アグリッパも承知したので、オクタウィアは自分の娘を戻らせてアントニウスに嫁がせ、カエサルの娘はアグリッパが娶った。アントニウスとオクタウィアとの間にはふたりの娘が残っていたが、ひとりにはドミティウス・アヘノバルプスが娶り、才色兼備で知られたアントニアはリウィアの息子で、カエサルの養子に当るドルスが娶った。この間からゲルマニクスとクラウディウスが生まれ、クラウディウスは後に皇帝となり、ゲルマニクスの子供たちの中でガイウスは皇帝として立派に統治したが、ほどなく子供や妻とともに殺され、アグリッパはアヘノバルプスによってルキウス・ドミティウスを生んだ後、クラウディウス・カエサルに嫁いだ。クラウディウスはアグリッパの息子を養子にしてネロ・ゲルマニクスという名を与えた。このネロは私の時代に皇帝となり、母を殺し、愚行と狂乱によってもう少しでローマ帝国を顛覆させるところであったが、それがアントニウスから数えて五代めの子孫に当るのである。

- (1) カエサリオンも殺されている(本伝八二)からこの記述は不正確である。
- (2) ユバ二世。アフリカ北西部マウリタニアの王。ローマで教育をうけ、ギリシア・ローマ風の文化を自国に導入し、ギリシア語でローマ史などの著作を出した。
- (3) ユルスまたはユリウス・アントニウス。前一三年法務官、前一〇年のコンスルに就任したが、前二年にカエサル(アウグストゥス)の娘大ユリアと姦通した罪に問われて自殺した。
- (4) 前の註の大ユリア。初めの夫マルケルスに前二一年に死別した後、翌年皇帝となったティベリウスに嫁いたが、前註のアントニウスとの姦通のことで父の家父長権発動によりナポリ沖合のパンダテリア島に追放された。
- (5) ガイウス・ユリウス・カエサル・ゲルマニクス、通称カリグラ。この皇帝は一般に晩年ネロのような暴君となったため暗殺されたと伝えられているが、ブルタルコスの評価は異なっている。

度量衡表

I 長さ(距離)の単位

《ギリシア》

付表1 ギリシアの「指の幅」を基準にした長さの単位

単位呼称	ダクテュロス	備考
ダクテュロス dactylos	1	指一本の幅。
コンデュロス condylos	2	指の中央部の骨の長さ。
パラスト palaste (またはドーロン doron)	4	手を握ったときの横幅。
ディカス dichas (またはヘーミポディオ hemipodion)	8	「プース」の半分、半歩。
リカス lichas	10	おや指の先から人さし指の先まで。
スピタメー spithame	12	おや指の先から小指の先まで。
プース pus	16	足(アッティカ単位では295.7mm)
ピュグメー pygme	18	肘から指の付け根まで。
ピュゴン pygon	20	肘から握りこぶしの先まで。
ペーキュス pechys	24	肘から指の先まで。

付表2 ギリシアの「プース」基準の長さの単位

単位呼称	プース	備考
プース pus	1	
ベーマ bema	2 ¹ / ₂	歩幅
オルギュイア orgyia	6	尋(ひろ)
プレトロン plethron	100	(約3メートル)

* ギリシアの長さ(距離)の基本単位は「プース」(pus = 「足」)。若干の地域差があり、
 (イ) アッティカ単位 295.7mm。
 (ロ) オリュンピア単位 320.5mm。
 (ハ) アイギナ単位 330mm。

付表3 ギリシアの「スタディオ」を基準にした長さの単位

単位呼称	プース	スタディオ	備考
スタディオ stadion	600	1	(アッティカ単位では177.4メートル)
ディアウロス diaulos	1,200	2	「往復」の意。
ヒッピコン hippikon	2,400	4	ヒッポス「馬」の意から。
パラサングス parasanges	18,000	30	ペルシアから来た単位名称。

ブルタルコス

世界古典文学全集 第23巻

昭和41年10月31日発行

訳者代表 村川堅太郎

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8
 振替東京 4123 電話 (291) 7651

908
 ㄨ
 23

12059